

養生学研究

第 11 卷 第 1 号 (通算 13 号)

2017 年 12 月 31 日発行

【原著論文】

蒲生諒太 (京都大学大学院)

健康太極拳の誕生

ー楊名時とその太極拳普及初期に関する歴史研究ー

1

【原著論文】

武者小路澄子(bird sanctuary research institute) 加藤敏弘(茨城大学)

遠藤卓郎(つくば気功研究所)

気功練習における初心者の非言語・身体コミュニケーション

ー映像を用いた質的分析と省察ー

23

健康太極拳の誕生

－楊名時とその太極拳普及初期に関する歴史研究－

蒲生諒太*

The Birth of Health Tai Chi Juan:

A Historical Study of the spread of Yang Ming Shi's Tai Chi Juan in the 1960s and 1980s.

GAMO Ryota

Abstract

The aim of this study is to clarify Yang Ming Shi's actions in the early era of Tai Chi Juan's spread in Japan (1960s-1970s). Yang Ming Shi was the founder of Health Tai Chi Juan, which are the unique style to Japan and arranged by him for Japanese practitioners. Although Yang was one of the innovators of Japanese Tai Chi Juan, previous studies of this subject do not consider his actions of founding and spreading Health Tai Chi Juan. This study will try to clarify the unknown points during this period.

This study first checks the birth point of his Tai Chi Juan style where was the training in Asia-Africa Linguistic Institute in 1960. This study finds out the error of his describe the date of this training, rewrites the date and the situation of the first Tai Chi Juan training.

Next, this study describes the "Japan Tai Chi Juan Association," where Yang formally taught Tai Chi Juan. This organization was founded during period of disconnect between Japan and China. After the restoration of diplomatic ties between these nations, the organization denied his original style of Tai Chi Juan. Therefore, he had to found his original organization by some patrons.

This study next indicates the relationship between his organization and the "Society of Health and Longevity." Yoshida Seizo, who was a doctor and a patron of Yang, was the founder of the "Society of Health and Longevity." Although Yang and Yoshida formed a partnership aimed at spreading Tai Chi Juan, Yoshida ended his support toward Yang after a disagreement. This paring made the original media of his organization.

Finally, this study organizes the whole situation of the birth of Yang Ming Shi's Tai Chi Juan and its spread during this period. Chinese language teacher Yang taught Tai Chi Juan as the introduction of Chinese culture. The "Japan Tai Chi Juan Association" made him the authority of Tai Chi Juan in Japan. Denying his style by this organization and breaking his relationship with Yoshida gave Yang a chance at independence as Tai Chi Juan's organization founder.

キーワード：太極拳、歴史研究、楊名時、健康太極拳

*京都大学大学院教育学研究科(Graduate School of Education, Kyoto University)

7r.lss001@gmail.com

I 序論

1. 養生法としての太極拳

本稿は日本独自の健康太極拳を確立した楊名時(1924-2005)の太極拳¹⁾普及初期に焦点を当てた歴史研究である。まずは本稿で行う検討の背景にあたる、養生としての太極拳や楊が日本の養生へ果たした貢献などについて説明を加えたい。

太極拳は中国武術の 1 つである。中国の陳家溝発祥のこの武術は当地の陳家に伝来していたもの(陳式太極拳)を楊式太極拳の祖、楊露禪が北京へ伝承した際、都市部の文人向けにアレンジし、現在のゆったりとした動きとなったとされる。陳式太極拳が発端となった太極拳は楊式太極拳へと展開した。その後、それぞれの背景となる武術や文化の違いから、様々に分派、継承されていった(笠尾、1994、2000、松田、2001などを参照)。

この武術の養生的な側面に着眼したのは中華人民共和国の毛沢東であった。若き毛は 1917 年発表の論文で人民の身体を鍛える必要性を説き、「体育は養生の道」として自身でも運動法を開発・提唱した(毛、1964)。体育＝養生に注目していた毛は陳式太極拳や楊式太極拳など、様々に分派し発展していた伝統太極拳(伝統拳)をもとに人民が簡単にできる制定拳(簡化太極拳)を編纂するよう指示を出した(中華人民共和国体育運動委員会、1977 などを参照)。こうして 1956 年、「太極拳運動」である簡化 24 式太極拳が楊式太極拳の李天驥らによって編纂され中国政府が制定した(李、1992 など参照)。

この当時、日本と中国の間は第 2 次世界大戦の影響から国交が断絶されており、大陸で起きた太極拳運動の萌芽は日本にはほとんど届いていなかった。1972 年の日中国交正常化以後、中国政府が主導し、日本の各競技団体が視察団を送るなどして、中国の太極拳運動、そして、スポーツ化された武術太極拳は日本でも広がって

いく(李、2009 を参照)。

太極拳はスポーツ競技としてその名を広めていくが、一方で養生法としても普及・研究されている。たとえば、かつての日本の太極拳普及の中心であった全日本太極拳協会の三浦英夫(1979a/1979b)は『美と心と健康の太極拳』・『太極拳健康法』を著し、健康のための太極拳を標榜していた。現在では楊(2007)や楊・楊(2007)など、健康・美容志向の太極拳が普及されている。太極拳の健康面での効果は学術的にも検討されてきている。メタアナリシスとしては、身体機能や精神的健康への効果(大平ら、2010)、中高齢者の健康への影響としては心身の機能低下予防(笹原・松原、2016)が太極拳に存在するという検討が行われている。また、認知機能の改善の可能性が示唆される一方で(孫、2011)、がん患者へは効果が明らかになっていない(奈良ら、2013)。このように太極拳の心身の健康への効果測定は研究され一定の効果が認められているものの、まだ、未解明な部分が多いといえる。

以上のように現在では健康・美容の技術としての太極拳の普及やその心身への効果が研究されており、太極拳の養生法としての側面が脚光を浴びているのである。

2. 健康太極拳²⁾と楊名時について

先に示したように簡化太極拳が誕生してから日中国交正常化までの間、つまり、1956 年から 1972 年の間、日本では太極拳なるものが全く広がることなく、中国発の養生法に日本人たちが触れられなかったかということ、実はそうではない。むしろ、この間こそが、日本での太極拳普及の草創期といえ、武術太極拳以前の太極拳指導者たちによる交流・普及活動があったのである。それは香港経由で渡ってきた華僑(王編訳、1976 や黄、1986)、中国からの復員兵士(永富、1986、1995)、彼らから学び独自に研鑽を積んだ日本人指導者(大滝、1972)らによるものだった。

その中でも武術太極拳に対して、健康太極拳の旗印を掲げ、伝統拳・制定拳ともつかない、第三の太極拳である日本独自の太極拳を展開していったのが楊名時である。楊は中國大陸に生まれ、学齡期、武術を学んだ。その後、留学生として来日、京都帝国大学で学び、東京中華学校の校長を経て、大東文化大学の教員となった人物である。彼は中國大陸で学んだ伝統拳をベースに、制定拳を日本人向けにアレンジし、楊名時太極拳を作成、さらに気功法の八段錦やスワイショウ、瞑想法である立禅をパッケージにした健康太極拳の創始者となった(楊監修/楊・橋、2000、楊・橋、2011などを参照)。

八段錦やスワイショウの取り入れなど、楊の太極拳には気功的な部分があり、彼は日本における気功普及の第一人者という一面も持っていた。中国政府によって編纂された健身気功の日本語翻訳テキストには楊が翻訳監修として名を連ねている(中国・国家体育総局健身気功管理センター[編]、楊・帶津[日本語監修]、2004)。また、従来、秘伝とされていた様々な気功法をカタログ化(津村、1990や2011など)するなど、日本での気功普及をリードしている津村喬とも強い結びつきがある。日本での津村の最初の師は楊であり(津村、2014)、彼の気功研究の集大成といえる『実践 伝統四大功法のすべて』の「八段錦」の巻では中国気功の大家である焦国瑞の八段錦と並び、楊の八段錦が収録され「日本で一番親しまれ、実際にたくさんの人にやられてきた気功」として評価されている(津村[編]・帶津[監修]、2004、38)。

さらに健身気功日本語テキストの監修者で、ホリスティック医学など(帶津[監修]、1993)、日本での養生研究・実践の第一人者の帶津良一は、楊と親しい関係にあり、『ドクター帶津がすすめる 50歳からの楊名時健康太極拳』と銘打った書籍をともに記している(楊・渋谷、2004)。また、自身も健康太極拳を実践し、前出の『実践 伝

統四大功法のすべて』の「八段錦」の巻では、帶津・津村・楊で鼎談し、さらに帶津が楊の八段錦を実演している(津村[編]・帶津[監修]、2004)。2000年には帶津は楊名時太極拳21世紀養生塾を立ち上げ、2012年にNPO法人 楊名時太極拳・養生塾として塾頭を務めている³⁾。帶津(2016)はアグネス・チャンをモデルに太極拳を養生法として紹介しているが、ここで紹介されているのは健康太極拳(楊名時太極拳及び楊の八段錦)である。

このように日本の養生に功績を残した楊であるが、彼のキャリアは太極拳や気功一色というわけではなく、紆余曲折を経たものとなっている。健康太極拳の『規範教程』を編纂した楊進・橋逸郎(2011)は学齡期に楊が「伝統楊式太極拳108式」を修めつつ、その師である王新午より「伝統呉式太極拳」の風格を受け継いだと記しているが(p.19)、他方で楊は長年の空手愛好者でもあり、後述するように自身の太極拳が空手の影響を受けていることを述べている(楊、2004、152)。また、そのキャリアの多くは武術家としてのものよりも、教師(とくに中国語教師)という文人の職業が占めている。

このように多様な経歴を持つ楊が太極拳の指導者として、独自の太極拳を普及し、組織化したのは中年期以降のことであった。彼自身の転換点となったのは、1960年から1980年代にかけて健康太極拳を確立し、その指導パッケージや組織を形成していった時期と考えられる。この時期に、中国語教師楊は太極拳指導者としてその身を立てたのである。興味深いことにこの時期は先に示した日本における太極拳普及草創期と重なっている。

一方でこの時期についての歴史研究はほとんど進んでいない。当時の人々の断片的な語りが残されているにすぎず、実際に何が起きたのか分からずにいる。日本の太極拳普及についての数少ない研究の1つである李(2009)でも、この

草創期の出来事について詳しい記載はほとんど見られず、楊や彼の団体についての記述も一般的な内容を除いて詳述はされていない。1960年代から継続する団体はほとんど存在せず、太極拳普及草創期の出来事そのものが不明瞭となっている上に、楊自身も自伝などで当時の出来事をぼかして語ったり、事実関係がはっきりと記されていない（楊、2001 年など）、歴史的記述としてそのまま受け取ることはできない。日本健康太極拳協会でもとくに 1960-1970 年の頃に関しては資料不足であるということが表明されており（日本健康太極拳協会／楊名時八段錦・太極拳友好会、2000、48）、協会としてもその頃の出来事を把握しきれていない様子である。

このように日本の養生実践に功績を残した楊と彼の太極拳がどのように誕生し、初期の展開を果たしたのか、不明な状況である。このことは日本の昭和養生史を考える上で大きな史的欠落として理解される。

3. 本稿の目的と構成、方法について

このような問題意識の中で、本稿では日本独自の養生法として展開した健康太極拳とその創始者である太極拳指導者・楊名時の誕生、その展開について明らかにすることを目的とする。それは中国語教師・楊名時がどのような経緯で太極拳指導者・楊名時へと変貌し、自身の組織を確立したのかという経緯を検討するものである。また、日本における太極拳普及期である、1960 年代から 1980 年代にかけての楊の活動と周囲の状況を当時の資料や聴き取り調査をもとに再構成する取り組みとなる。

以下、3 章に渡って太極拳指導者としての楊と彼の太極拳がどのように誕生し展開していったのか明らかにする。

Ⅱ 章では中国語教師楊が初めて太極拳を教えた場面を検討していく。すでに楊自身、1960 年にアジア・アフリカ語学院という語学学校で学

生を対象に教えたのが初めてである旨、書き記している。この点についてアジア・アフリカ語学院に残された資料、当時からの弟子の証言をもとに検証し、楊が 1960 年代前半にどのようなかたちで太極拳を指導していたのか、明らかにする。

Ⅲ 章では中国語教師であった楊が太極拳指導者として世に出た日本武道館での稽古について検討していく。そこではあまり楊自身が言及しない日本太極拳協会という団体での彼の活動と最終的に彼が窮地に立たされたことを当時の資料と証言から明らかにする。

Ⅳ 章では日本太極拳協会を去った後の楊と彼の後援者となった吉田誠三、吉田が率いた健康と長寿の会との関係について検討する。楊と吉田の関係の変化と最終的な決裂の経緯を明確にしていく。

最後に、これら日本太極拳協会からの脱退や健康と長寿の会との別離が現在の日本健康太極拳協会の前身楊名時八段錦・太極拳友好会を独立団体として確立していく契機となったこと、つまり、健康太極拳の誕生に大きく影響を与えたことを示す。

本稿での研究方法について記したい。本稿では資料及び聴き取り調査で得られた証言をもとに検証を行う。資料及び証言は楊の記述を検証する目的で収集され、1 つの出来事について複数の資料及び証言を突き合わせ、整合性を検討、さらに当時の時代背景を考慮して信憑性を確認した。また、楊と袂を分かった人物や関係者の資料や聴き取りも行い、双方の視点から事実を明らかにすることに努めた。ただ、既に鬼籍に入られていたり、組織が解散し関係者の足取りがつかめなかったりする場合などは限定的な資料、証言から検証を行った。

検証のために用いた主要な資料・証言は以下の通りである。Ⅱ 章ではアジア・アフリカ語学院が残っていた資料及び当時の太極拳指導者と

しての楊を知る関係者の聴き取り証言、Ⅲ章では日本太極拳協会の関係者からの聴き取り証言が難しく（関係者の多くが亡くなり、組織が雲散霧消しているため）、当時の出来事をまとめた関係者の資料及び楊側の関係者の聴き取り証言、Ⅳ章は吉田及び健康と長寿の会の関係者の聴き取り証言、資料、それに対して楊側の関係者の聴き取り証言を用いた。

聴き取り調査に関しては協力者の同意のもと、音声を記録し、トランスクリプトを作成、資料データとして用いた。その後、協力者との電話でのやり取りの中で新しい事実が判明した場合を電話での聴き取り調査として、その旨、記した。

Ⅱ 「1960 年」の検討と健康太極拳の「種」

1. 中国語教師・楊名時と武術

本章では中国語教師であった楊が最初に太極拳を教え始めたとされる 1960 年に照準を合わせ、当時の楊の状況を検討する。

ひとまず、本節では楊が中国語教師として生計を立てるに至った経緯を彼の証言(楊、2001)をもとに整理したい。

「官費留学生」として来日し、留学生向けの教育機関である東亜学校で学んだ後⁴⁾、楊は京都帝国大学法学部へ進んだ。京都に滞在中、結婚、家庭を持った。終戦後、彼は帰国を断念して日本での生活のために東京へと向かう(楊、2001、11-98)。楊は、帰国断念は国共内戦に抛る混乱を避けたものであると示唆している(同、102-103)。

彼が生まれ育った頃の中国は日中戦争(1937-1945)の只中であつた。当時、日本軍が占領した土地は軍によって設立された傀儡政権の支配下になることがあつた。彼の故郷、山西省は 1937 年 12 月に北京にできた中華民国臨時政府のもと、他の華北の地域とともにこの傀儡政権によって統治されることになった。この政権は後に、南京で日本軍の指導のもと、汪兆銘に

よって樹立された中華民国国民政府に吸収合併され、同政府の華北政務委員会の指導下におかれることになった(菊池、2014)。

1943 年に「山西省の官費留学生」に合格した楊は(日本健康太極拳協会、2010、255)、この中華民国国民政府の留学生として日本にやってきたと考えられる。同政府は日本の敗戦まで占領統治を行っていたため、戦後、同政府の留学生たちが日本軍への協力者として訴追される可能性が高まり、実際、多くの留学生が帰国を躊躇していたという(田中、2003)。楊は終戦後の大陸での混乱を避けたと示唆しているが、当時の官費留学生が置かれた状況が少なからずとも彼の行動に影響していると考えられるだろう。

楊は大阪で新聞社の職員として勤務した後、東京に出て東京中華学校の教員に、そして、校長に就任する⁵⁾。楊の証言では中国大陆における国民党と共産党の内戦が校内にまで及ぶ中、自身が明確な態度を示さずにいたため、退任に至ったということである(楊、2001、108-109)。

1957 年より失職した楊は 1966 年 4 月に大東文化大学専任講師へ就任するまでの 9 年間、中国語の非常勤講師として生計を立てることになる。9 年間の中国語教師時代、楊は中国にいる友人から贈り物として 1 枚のポスターを手に入れる。それは簡化 24 式太極拳の套路図であつた。楊は友人とそのポスターをもとに制定拳を練習する(同、141-142)。このとき、彼は幼いころに学んだ伝統拳の素養をもとに制定拳を自分自身で解釈したようである。それまで太極拳については気分転換に行っていたと記している⁶⁾。

一方でこの頃の楊は日本の武術との関係を深めていた。彼は東京中華学校時代に空手と出会い、のめり込んでいく(同、127)。楊は武術に関心が強く日本では柔道を稽古していた。東京中華学校に教えに来ていた教師が空手をしており、楊が柔道をしていると知って、空手をしないかと誘ったのである(同、124-125)。楊によると 5

段を 45 歳で取ったという(同、127)。この記録に従えば、1969 年まで楊は空手に没頭していたことになる。空手は楊の太極拳にも強く影響を与えたようである。彼は 1988 年、自らの組織の機関誌に次のように書いている。

私は幼少の頃から中国武術をいろいろやってきた。日本に来てから柔道、合気道、空手などをやり、いちばん長く続いたのが空手である。空手を通じていちばん貴重なものを頂戴できたような気がする。私は私なりに中国のゆったりとした、柔らかい動きがわかるが、また、空手の決めも大好きである。私の太極拳は、中国の太極拳が基盤だが、日本の空手が体に生きていて、中国と日本のよさを合わせていると思っている(楊、2004、151-152)。

中国語教師として生活をしながら、空手に没頭する中国人。気分転換に太極拳をたしなみつつ、同郷の友人より手に入れた簡化太極拳の套路図をもとにアレンジした自身の太極拳を形成していく。それが 1950 年代後半から 1960 年代にかけての楊の姿であったと考えられる。

2. アジア・アフリカ語学院にて

楊は調布に新設された語学学校アジア・アフリカ語学院に中国語の非常勤講師として勤務することになった。彼はこの学校で初めて太極拳を教えたという。これが「1960 年」であるという。日本健康太極拳協会は 2010 年を楊名時太極拳 50 年としており、50 年史の年表では 1960 年の項目に「東京・三鷹のアジア・アフリカ語学院で授業の合間に楊名時先生が太極拳の指導・普及を開始」(日本健康太極拳協会、2010、255)とあり、健康太極拳の端緒を「1960 年」に定めている。

しかし、この「1960 年」という年代について

は、資料との突き合わせから疑問が浮かぶ。というのも当該のアジア・アフリカ語学院の開校は 1962 年であり、1960 年には存在していなかったのである。この点をアジア・アフリカ語学院側の資料から検証してみよう。

そもそもこのアジア・アフリカ語学院とはどのような組織か。この学校は郭博という人物が残した郭沫若文庫をもとに、菊地三郎らによって建設されたアジア文化図書館(1958 年開館)が前身となった語学学校である。この学校が開校したのが 1962 年であり、それまでに前身の図書館で中国語講座を行っており、楊がそこで語学の授業を持っていたなどの事実は関連資料からは読み取れない(50 周年記念誌参照)。そのため、1960 年にアジア・アフリカ語学院やその前身の機関で楊が教壇に立っていた可能性はほとんどないと思われる。

1962 年の開校初年度の教員記録には楊の名前はない。記録では中国語講座の学生は本科 7 名で教師は 5 名、そのうち、中国人と思しき教師は 1 名だけである(50 周年記念誌、78)。楊の名は開校 2 年目、1963 年の記録にある。7 名の中国語教師に中国人と思しき人物が 3 名で、楊はその 1 名である(同、83)。ネイティブ教員の補充として当時、東京の大学や専門学校で教えていた楊が非常勤として採用された可能性が考えられる。

アジア・アフリカ語学院の学生数(本科)に注意したい。学校は 2 年制の専門学校である。1962 年創立当初の入学者は 32 名(50 周年記念誌、78)、1963 年 28 名(同、83)、1964 年 35 名(同、90)であった。楊が着任した 1963 年頃のアジア・アフリカ語学院では 2 つの学年合わせて学生数が 60 名程度だったようである。1963 年、新入生の中で中国語講座は 5 名であった(同、83)。学生数 60 名のうち、中国語を学ぶ学生は、2 年生 7 名と 1 学年 5 名で 12 名程度ではないかと考えられる。

楊はアジア・アフリカ語学院に 1963 年から勤務していたことが資料の精査から判明した。そして、楊がこの学校にやってきた頃、中国語を学ぶ学生は非常に少なかったことも明らかになった。その上で次の楊の文章を読みたい。

昭和 35(1960)年、私は講師をしていた学校のひとつ、三鷹にあるアジア・アフリカ語学院という学校で授業の合間に簡化太極拳の一連の動作を自らやり始めました。最初は「なんだろう、あれは？」という目で遠巻きに眺めていた学生たちも、回を重ねるごとにだんだんと私のほうに近づいてきて、私の動作をまねるようになったのです。/「これは中国の太極拳というものです」/と、私は集まった学生たちにいいました。そのうち、熱心な数名と授業が終わってから太極拳をやり、その後で深大寺へおそばを食べに行くという習慣までできました。アジア・アフリカ語学院は夏の合宿を恒例としていましたが、その合宿先でも学生たちと一緒に簡化太極拳をやりました。こうして、現在も続いている「楊名時太極拳」の最初の一粒の種が蒔かれたのです(楊、2001、144)。

年代については先に示したとおりである。アジア・アフリカ語学院の学生数は 60 名程度と少なく、中国語を学ぶ学生は 10 名程度である。楊の太極拳を「授業の合間に」眺めていた学生たち、そのうち、興味を持った学生となるとかなり少ないと予想できる。少人数授業であることから緊密な人間関係が生まれ、その延長で学生たちが講師の行う太極拳に同調したと考えることができる。ただ、楊の初期からの弟子に尋ねても、この学生たちのうち、後になるまで楊に師事し続けた人はいない。そうすると、このアジア・アフリカ語学院の太極拳において、太極

拳の師弟関係が存在したとは考えにくい。太極拳として明確な稽古がそこにあったというよりも語学教師と学生の関係性が第一にあり、その延長にある文化学習として太極拳を捉え、授業終わりの習慣として実践していたと考えられないだろうか。

アジア・アフリカ語学院で楊が活躍している写真が残っている⁷⁾。これは学院の「合宿」風景である。写真の中には学生の型を指導している空手着姿の楊の姿があり、学生は腕が伸びきっており、突きの練習をしているように見える。前述のように当時、楊が空手に没頭していたことを考えると、この写真は空手の指導とみたほうが良いだろう。もちろん、楊が記したように太極拳を行ったのは事実だろう。しかし、それは語学合宿の合間の気晴らしに、空手や太極拳を文化学習の一環として学んでいたのではないかと推測できる。

それではアジア・アフリカ語学院で蒔かれた「種」とは何か。それは、楊が太極拳を行う際、少数の学生が同調したものであり、授業の合間に講師と談話するものの延長にあった程度ではないかと推察される。少なくとも組織だった稽古や大人数による演舞が行われたわけではなく、もともと少ない人数の学校のさらに少ない人数で行なわれていた授業(のようなもの)の一部という認識のほうが妥当だろう。

3. 中国語の教室で

この頃の中国語教師・楊名時の姿はどのようなものだったのか。アジア・アフリカ語学院の資料には残されていない。そこで後に彼の太極拳普及をサポートすることになる渋谷(後の楊)麻紗⁸⁾の証言に注意を向けたい。

彼女によると楊は他の中国語の教室でも太極拳らしき動きを授業の合間で披露することがあったという。1963 年頃、善隣書院という語学学校に通っていた学生の渋谷(楊)は楊が授業中に

不思議な動きをするのを目撃している。

時々、なんかふわっと、「ちょっと肩凝ったから、なんかやるから」なんていうことでね、「なんかやる」っていってもそれは別に太極拳のあれ(注：套路)じゃなくて、その中の一部だったかもしれない。型の一つぐらいはやったかもしれない。で、みんなを笑わせたんだよね。⁹⁾

この証言に出てくる「なんか」が太極拳かは分らない。「肩凝り」を治療する養生法であることは確かであり、太極拳あるいは気功の功法である可能性がある。少なくとも当時没頭していた空手の動きは「ふわっと」と表現されるものではないため、これが空手である可能性は考えにくい。

重要なことは語学の授業においてこのような動きを行うことが楊にとって日常的であったということである。この動きが太極拳や気功に通じるものであるなら、アジア・アフリカ語学院とほぼ同時期の善隣書院でも太極拳あるいは気功のようなものを披露していたことが判明する。中国語教師である楊は教室の中で太極拳ないしは気功のような養生法を披露し、少数の学生がそれに興味を持っていた。しかし、それは教えるというものではなく、あくまでも楊にとっては自身が養生を行うこと、あるいは中国文化の紹介であったと考えられるのである。

こうして 1960 年代初頭の楊とその太極拳の様子が明らかになってきた。1963 年頃、アジア・アフリカ語学院で授業の合間などで太極拳をしていた楊に、学生から少人数のフォロワーが出てきた。同時にこの頃、楊は他の中国語の授業内でも太極拳ないしは気功のような養生法を披露することがあった。これらのことを考えると、この頃の実践はあくまでも中国語講師と学生の関係性を基盤とした文化学習あるいは授業の延長

に行われていたものと考えられるのである。

Ⅲ 日本武道館での出来事

1. 楊名時と日本の指導者との交流

本章では日本武道館での日本太極拳協会の活動との中で太極拳指導者・楊名時が誕生した経緯と顛末を検討する。

前章では 1963 年頃に楊が太極拳を学生とともに行っていたということが証言と当時の資料から示された。実はこの当時、楊が日本の太極拳団体の学習会に参加していたという記述が残っている。楊の著作や日本健康太極拳協会の資料にはないこの話について、関係する人々・組織が断片的に残した資料をもとに検討したい。

黄耐之という華僑が東京都内で太極拳を指導していた。黄は日本の太極拳普及の草創期を支えた指導者の 1 人である。彼は、厚生大臣を歴任し、日本での太極拳普及に貢献することになる政治家、古井喜実に請われて東京で太極拳の学習会に参加し講師をしていた。学習会は黄だけではなく、中国から復員した日本人も指導者として参加していた。この学習会を母胎に 1966 年に＜日本太極拳協会＞という(本章で検討する日本太極拳協会の前身となる)団体が立ち上がった。黄とともに講師を努めた永富博道の回想ではこの 1966 年の＜日本太極拳協会＞に楊も参加していたという(永富、1986、6)。また、永富の弟子の前野は 1964 年の砂防会館での学習会にも楊が参加していたと書いている(ただし、当時の前野は太極拳学習をしていないため、永富から聴き取った内容をもとに記していると思われる。前野、1995、29)。

1966 年の＜日本太極拳協会＞で楊が初めて太極拳を学んだとすれば、1963 年頃にアジア・アフリカ語学院で太極拳を行っていたことはまったくの虚偽となるため、それは考えにくいだろう。そこで一から太極拳を学んだということはなくとも、同好の士として、自分の套路の点検

(とくに簡化太極拳について)などを目的に参加したという可能性が考えられる。実際にのちにこの団体に統合を持ちかける日本武道館の三浦(1980)は、この団体を「相互学習」の会だと認識していた。

後述する日本太極拳協会では楊とともに師範として指導に当たった大瀧一雄は当時、＜日本太極拳協会＞に参加していた。後年、自分が楊に太極拳を教えたとは彼は弟子に告げている(松田、1987、14)。これが＜日本太極拳協会＞での出来事なのか、日本太極拳協会での師範同士の相互交流であったのかは分からない。

楊は手に入れた套路図をもとに簡化太極拳を自己流で習得したと述べていたが、武術好きの楊が日本国内で立ち上がった太極拳の学習会に参加していた可能性は全くないとは言い切れないだろう。この点については楊自身が語っていないし、各資料にも楊の参加について詳述されているわけではないので、その実際は不明瞭である。ただ、楊が太極拳を授業中・授業後に披露しだしたこの頃、太極拳への注目は日中友好ムードの中で確かに存在したということである。

2. お汁粉と職員向けの活動

さて、非常勤の中国語教師として働いていた楊は1966年、大東文化大学文学部に専任講師として招かれることになる(楊、1995、5の「略歴」参照)。こうして9年間に及んだ楊の非常勤生活は終わりを告げ、安定したポストを獲得するに至った。

ここで彼は太極拳指導者・楊名時へと転換する機会に巡り合うことになる。この出来事は楊の著作や日本健康太極拳協会の資料にも詳しい。今回、当時の資料を入手したので、それもとに検証し、詳しい顛末を記したい。

大東文化大学に職を得た楊は武術としては空手にのめり込んでいたようである。この頃には名だたる空手家と交友関係が生まれていた。

1968年の1月7日、楊は後樂園卓球センターでの日本空手協会鏡開き稽古に参加し、太極拳の套路を披露する。このことが翌日8日(月曜日)付けの日刊スポーツにコラム記事として掲載された。記事は11面のコラム「目・耳」である。このコラムではスポーツ関連の出来事が複数、アラカルト的に紹介されている。楊の記事もあくまでも1つの他愛ない出来事として取り上げられている。記事のタイトルは「これはビックリ? 一空手協会けいこ始めにインスタント汁粉」である。

日本空手協会(後樂園卓球センター)のけいこ始め。紅数点をまじえて「エイ、ヤッ」ドタン、バタンと勇ましかったがそのあとの汁粉会に同協会創設以来の“インスタント汁粉”が出てキモをつぶした人もいた。/ 昨年までは地下のグリルが作ってくれたが、いまはグリルが休業中とあって、やむない窮余の一環。中国武術「太極拳」を披露した大東文化大の楊先生も「ヨウいわんわ」といった表情で好物の汁粉をすすり、手伝いの女性たちも「簡単でいいけど、やはり手持ちぶさた」と苦笑していた¹⁰⁾。

上に全文を引用した記事自体は、鏡開き稽古で振る舞われた汁粉がインスタントだったという何の変哲もない囲み記事である。スポーツ記事としてニュースバリューのあるものとして書かれているわけではない。この記事に挿入されたカッターシャツ姿の楊の套路と思しき写真がある。これが、楊が太極拳指導者として世に出るきっかけとなった。この記事を見た日本武道館の事務方であった三浦英夫が楊に稽古の指導を頼んだ。中国武術に興味を示していた三浦は1965年に日本武道館内に太極拳の研究会として「太極拳研究会」を立ち上げていた。

三浦はひとまず、楊を日本武道館の職員向け

の学習会に招聘することにしたようである。この招聘について、楊はそれほど前向きではなかったと後年語っている。新聞記事を読んだ三浦が電話で楊に会いたいと告げた。このやり取りを後年、楊は次のように自著に記している。

開口一番、/「楊先生、八段錦・太極拳を武道館で教えてくださいませんか。うちの職員を全部集めますから、はじめてもらえませんか」/と、大変な肩の入れように、わたしはもうびっくりしてしまい、/「武道を教えたことも経験もないし、自分も教えるようなものは持っておりません。わたしには向いていないと思うのですが……」/と、二の足を踏むと、三浦氏はたたみこむように……熱心にすすめられ、/「それでは、教えることは学ぶことですから、みなさんといっ緒^マに学ぶつもりでお引き受けしましょう」(楊、1980、221-222)

この証言自体は脚色がされている。「八段錦・太極拳」とあるが、新聞記事で八段錦のことは書かれていないから、この表記は読者向けに書き加えられたものと理解できる。この中で楊が「武道を教えたことも経験もない」と語っていることには注意を向けたい。この語りが後年の記事であったとしても、これまでのアジア・アフリカ語学院での太極拳の披露と日本武道館の太極拳では全く質が異なっているということが読み取れる。武道として教えることに重点を置かざるをえなかった日本武道館での太極拳の特徴が現れている。そして、そのことに対して楊は自信がなかったということも表れている。

三浦の招聘に応じて楊は太極拳を職員に教えるために日本武道館に通い始めた。楊自身、空手を長年行っていたことから、日本武道館での稽古には気負いする面があったようだ。渋谷(楊)の証言に拠れば、それまで続けていたタバコを

やめたという。しかし、他の日本武道の講師や実践家の一部には評判は芳しくなかったようで、建設されたばかりの武道の殿堂日本武道館で中国の武術を稽古することへの批判もあったという¹¹⁾。

当初、稽古は職員に限られており、日本武道館の機関誌「武道」に収められた写真にも仕事帰りのシャツとスラックス姿のサラリーマン風の練習生が複数写り、さらには楊自身、授業終わりか、同じくシャツとスラックスのサラリーマン風の姿で太極拳の実技を教えている(楊、1968、64-65)。この記事は1968年3月のものである。日本空手協会の稽古初めでの太極拳披露が1月であるから、2ヶ月程度で楊は日本武道館で教室を開いたことになる。

さらにこの記事執筆においては善隣書院の学生であった渋谷(楊)が手伝っていると証言している¹²⁾。彼女の記憶では、この教室は数ヶ月、職員向けに行い、後に一般公開をしたという。楊は一般公開に際して、中国語教室の学生を勧誘した。その際、渋谷(楊)麻紗のみが参加し、楊の手伝いをするようになったという¹³⁾。実際に1968年5月の新聞記事¹⁴⁾では日本武道館の太極拳稽古が紹介され、連絡先が「太極拳研究会」となっている。1968年月上旬に始まった職員向けの学習会は5月頃には一般公開されていたのである。

当時、三浦には日本武道館事務員で、後に全日本太極拳協会の指導委員長を歴任する中野春美が同行しており、稽古のたびに楊は渋谷(楊)と、三浦・中野の四人で食事に行ったという。渋谷(楊)の回想では「豪華な食事」であったというから、一種の接待であったようである¹⁵⁾。このように楊と三浦の密接な関係性が築かれていた。

この教室で楊は本格的に太極拳を教えることになる。このとき、彼は自身の幼少期の体験をもとに稽古を筋立てることにしたようである。

すなわち、立禅による瞑想から始まり、気功法のスワイショウ、同じく気功法の八段錦前半、楊がアレンジした簡化太極拳の套路、中休みがあり、その後、24 式の型からの部分稽古、八段錦後半、立禅、スワイショウという流れである。渋谷(楊)によると、稽古は楊の套路を学習者が見取り、模倣する見取り稽古であったという¹⁶⁾。

八段錦は彼が学校の国術部で学んだ馬先生の指導法を引用したものであると語っていたようである¹⁷⁾。この頃には現在の空手着を来た、見取り稽古による立禅、スワイショウ、八段錦という健康太極拳のパッケージが完成していた。このように考えると健康太極拳(のパッケージ)の誕生は 1968 年とすることもできる。

以上の確定された年代は当事者たちの認識とは実は異なっている。楊は日本武道館で指導するきっかけとなった「鏡開きの稽古」を 1967 年 1 月 11 日としており(楊、2001、155)、日本健康太極拳協会の資料でもこれに続く日本武道館での稽古も 1 年間、誤って記載されている。また、楊と同行した渋谷(楊)は、楊が中国語の教室で学生たちに日本武道館での稽古に来ないかと誘ったのを「1966 年」の「春」としている¹⁸⁾。しかしながら、日刊スポーツの記事や日本武道館の機関誌などから、日本武道館での稽古初めは 1968 年だと考えられるのである。

3. 日本太極拳協会との決別

楊の太極拳教室は 1968 年から一般公開された。その間、三浦は都内で行われていた<日本太極拳協会>という学習会を知る。彼は「立ち消え」状態だったその会の会長古井に声をかけ、1969 年 8 月に両団体を統合、日本太極拳協会を発足させる。このとき、古井系の技術代表として獨協大学の教員である大瀧一雄が、三浦系の技術代表として大東文化大学の教員である楊が、それぞれ「師範」に就任することになった(三浦、1980、2-3)。

楊はこの日本太極拳協会での稽古をあくまでも日本武道館での稽古として、組織の内実やそこでどのような出来事があったのか、多くを語っていない(楊、2001 など)。そのため、楊の語りやそれをもとにした日本健康太極拳協会の資料では日本武道館＝日本太極拳協会での様子や顛末が不明瞭であった¹⁹⁾。また、日本太極拳協会自体が解散し、当時の資料の殆どが散逸しており、さらには関係者の多くが鬼籍に入っているため、日本太極拳協会側からの取材が難しい状況である。

今回は日本太極拳協会解散後、三浦がその顛末を簡潔に記した資料を入手した。この資料と当時を知る楊の弟子たちの証言とを合わせて、日本太極拳協会での楊の様子を検討したい。

日本太極拳協会発足後から、空手着で太極拳を行う楊の姿が資料から確認できるようになる(楊、1973、186)。1968 年 3 月頃の職員対象の稽古においては空手着を来ていないことから、この空手着は日本を冠した協会の師範となった楊の自負であるとも考えられる。のちに、この空手着姿の太極拳は健康太極拳のトレードマークとなる。日本武道館の教室を拠点としつつ、楊は空手道場など、都内の各会場での稽古を増やしていった²⁰⁾。日本武道館での活動が太極拳指導者・楊名時を生み出すとともにそのキャリアを飛躍的に発展させたのである。その背景には日本武道館建設の立役者の一人であった三浦(日本武道館、2015 参照)の後ろ盾があったのだが、両者の関係はしかし、日中国交正常化を機に崩壊していくことになる。

1974 年 6 月に古井の団体で学んでいた政治家、後藤隆之助が団長となり、日本太極拳協会の訪中団が組まれる(三浦、1980)。その後、後藤団長らによる報告会が行なわれるが、この会を契機に楊は苦境に立たされることになる。楊の著作の出版をきっかけに、1971 年から日本武道館の稽古場に通り始めた編集者で、のちに日本健康

太極拳協会で幹部となる中野完二は報告会について次のように証言している。

日本太極拳協会という名前で中国に勉強に行く団を 2 回くらいやったんですね。最初のときだったか終わってだったか……後藤隆之助という先生がそのときの団について行かれて、帰ってきてから朝日新聞の数寄屋橋の朝日講堂で報告会(注: を行った)。そのとき、「今までの太極拳はなんだったんだ」という批判(注: がされた)。僕は楊名時先生と隣りあわせてそれ聞いてて、それ以来「もう自分が受け入れられてないかな」ということ(注: を感じられて、それ)で(注: 楊は)行かなくなってしまった。²¹⁾

数寄屋橋にあった朝日新聞の会館で報告会が行われた。楊ら日本太極拳協会の師範を訪中団は非難した。このことを三浦は「技術指導問題」とし、活発な議論の後、「指導の基本原則は一切の日本的自己流技術を排し、中国武術協会の制定する(もの)……を学習するなどを決定」(三浦、1980、3)としているが実際は感情的な問題をはらむものであったようである。「自分が受け入れられない」という印象を受けたのではないかと中野は楊の心中を慮っている。

中野はこの報告会をきっかけに楊の日本武道館での稽古が終わったとしているが、渋谷(楊)はこの報告会の記憶がなく、その後、稽古場で起きたある出来事がきっかけではないかと述べている。渋谷(楊)の証言を次のように整理した。

その出来事は稽古の中休みに起きたという。「『ちょっと先生お時間ください』って言って、訪中団に参加したある弟子が出てきた。そして、「私たちが学ぶべきものは、中国の本物の太極拳です。楊先生の太極拳は本物じゃありません」と言ったという。渋谷(楊)によれば、「自分が中国行って習ってきたっていうような、そういう

話はしてない」という。渋谷(楊)は「この人はなに言ってるんだろう？」と思ったという。そのときに楊は「じゃあ、もう私は私の太極拳しかできませんので、私はここを去ります」と言った。すると弟子たちも状況に気づき「何人か涙流して」いたという。楊は「和して同ぜずね、(注: 訪中団に参加して中国式の太極拳をした人たちはその人たち)のやり方、私は私の(注: やり方)で。和して同ぜずでいきましょう」と言ったそう。『『けんかしないでお互いに違う道をそれぞれ歩みましょう』と言って、それでもそのとき、全部やったかな……最後まで。で、翌週からもう来なくなった』²²⁾。

両者が言う、楊の日本太極拳協会の去り際は異なっている。これはそれぞれがそれぞれの出来事にいなかったから生じている食い違いと考えられる。つまり、数寄屋橋での報告会には渋谷(楊)が、稽古場での出来事は中野がいなかったということであろう。そうすると、時系列的には報告会→稽古場と考えられる。報告会で一般論として従来の指導体制を非難され、稽古場に出てきていた楊を訪中団に参加した弟子が直接的に批判したということである。このように考えると、この批判を楊が受け入れるかたちで日本武道館を去ったと推測できる(時系列が逆なら、この批判を楊が理解できないと考えられる)。

さて、これが日本太極拳協会での稽古の実際であった。空手の好きな中国語教師から日本武道館に本部を置く団体の師範となり太極拳指導者として世間での注目が高まった中で自身の転機となった団体から自身の太極拳を否定される形で楊は日本武道館を去ったのである。こうして、1968 年から始まった日本武道館での太極拳稽古は 1974 年に幕を閉じた。その期間は 7 年近くと長期間に及んだ。これは楊にとって 40 代の後半にあたる。

日本武道館での稽古は日本太極拳協会という団体の稽古であり、そこでの稽古を通して楊の

太極拳指導のスタイルが確立していった。同時に楊は太極拳指導の場を日本武道館外に広げ、現在の日本健康太極拳協会の礎を作っていた。しかし、その独自のスタイルが日中国交正常化以降、正統的なもの(中国政府の制定したもの)ではないと非難され、結果的に組織を追い出された。こうして、楊は太極拳指導者・楊名時の最初の後援者である三浦との決別へと至ったのである。

IV 健康と長寿の会と楊名時八段錦・太極拳友好会

1. 楊名時の太極拳の組織化

1974年、楊は日本武道館を去ったが、ちょうど、日本太極拳協会を脱退するのと前後して朝日カルチャーセンターで太極拳講座が開設された(楊、2001、171では「1974年5月」)。この朝日カルチャーセンターが彼の太極拳の新たな普及拠点となっていく。

渋谷(楊)の回想では、教室に通っていた人たちが誰も辞めず継続し、「師範」となっていく中で新しい人の参加を可能にするために別の時間帯での教室を増やしていったという²³⁾。こうして実践者が拡大する中で1975年1月には楊名時八段錦・太極拳友好会が発足し、楊の太極拳は組織化されていくことになった。

楊は当初、自身の太極拳を「楊家太極拳」と称しており、伝統太極拳の「楊式太極拳」を引き継ぐものとして自己紹介をしていた²⁴⁾。ただ、楊の太極拳と楊式太極拳を比較した際、彼独特の技の解釈や型の創作、動きとしても空手的な決めや貯めが目立ち、楊式太極拳を引き継ぐというのは適当ではないと思われる。また、「楊家太極拳の正統の使い手」となると楊露禪の系譜に位置する伝人という印象が強く、楊の経歴を考えると不適当であった。最終的には自身の太極拳を「楊名時太極拳」とすることで解決したものの、この「楊家太極拳」自称は1980年代ま

で続いてしまう(楊、1980)。そのため、楊を批判する人たちはこの点を強調することになる(後述の吉田による楊批判など)。

ただし、友好会の名称に「楊名時八段錦・太極拳」とあるように、日本武道館を去った直後から自身の太極拳に自分の名を冠してオリジナルなものであることを明示していたということも指摘しておきたい。楊名時オリジナルの太極拳であるのか、中国の伝統的な太極拳であるのかは1980年代になるまで曖昧にされた部分もあったのである。楊が自己の権威付けのために敢えてこのようなことを行ったのか、あるいは日本での生活が長く中国武術の世界での常識が身についていなかっただけなのか、不明瞭である。

この点は資料もなく、確固たる証言もないため、判断はつきにくい。自身の太極拳をどのように呼ぶかという重要な事項について判断を曖昧にするなど、楊にはおおらかな、あるいは優柔不断な側面があったことは確かであろう。この性格が時として後援者との決別を生み出すことがあった。その代表的な例が、楊が日本武道館を去った後に彼の後援者となった吉田誠三との決別であった。

2. 吉田誠三と健康と長寿の会

健康と長寿の会は、名古屋の開業医である吉田誠三(1916-1983)が様々な養生法の普及のために発刊した『健康と長寿』誌の読者の会のことである。『健康と長寿』が発刊されたのが1969年であり、1972年には第1回の全国大会を行った。吉田は元来、当時の医師会会長武見太郎の抵抗勢力として活躍するほどの政治力のある医師であり、将来的には政界への進出も期待されていた。しかし、心筋梗塞により倒れ、以後、健康と長寿のための啓蒙活動へと尽力していく(蒲生、2016)。

楊は1972年の第1回大会の名古屋大会や翌年

の東京大会にも参加し、太極拳を披露している(日本健康太極拳協会、2010、255)。健康と長寿の会会長(名誉職と思われる)は古井であり、彼との関係で楊が呼ばれたのではないかと思われる。このように1972年頃、日本太極拳協会から楊が去る前に楊と吉田は出会った。楊は日本太極拳協会から退去するが吉田側の関係者によると、この点を吉田自身は後年になるまで知らなかったようだ²⁵⁾。日本武道館での騒動を知らないままに吉田は楊の普及活動をサポートしていく。

楊名時八段錦・太極拳友好会発足から2年後の1977年、吉田は自身が実質的なオーナーである『健康と長寿』誌の紙面を提供し、楊名時八段錦・太極拳友好会の機関誌「太極」が発刊された(日本健康太極拳協会、2010、218)。『健康と長寿』誌は一部の紙面が機関誌「太極」のものであったのである。1977年には共著で『まさつと呼吸健康法』という書籍を出版している(楊・吉田、1977)。このように両者は蜜月関係と呼べるものであり、『健康と長寿』誌に吉田が私財を投じることは楊の活動をサポートすることにもつながっていたのである。

3. 吉田誠三との決別

しかしながら、楊と吉田の関係は唐突に悪化し、両者は決別することになる。

日本健康太極拳の50年史では1981年に『健康と長寿』で楊を批判する記事が掲載され、それに続いて週刊誌での楊バッシングが行われたと書かれているものの、なぜ、両者が不仲になったのか、その顛末について詳しい経緯は書かれていない(日本健康太極拳協会、2010、179)。今回、『健康と長寿』の当該バックナンバーを入手、新たに得られた吉田・楊双方の関係者の証言もあわせ、当時の経緯をまとめた。

吉田側の関係者証言及び資料をもとに整理すると、次のような経緯で楊と吉田が仲違いしたようである。

1980年3月の日本交通公社主催、楊名時八段錦・太極拳友好会共催の訪中団へ吉田が参加した。このとき、吉田は楊の独特な太極拳に対する中国人たちの反応に違和感ないしは不信感を覚えた²⁶⁾。この出来事が背景となり、吉田は翌年1981年3月に名古屋にある楊の組織・奥伝会の新人事案を楊に提出、一時は楊もそれを受け入れた。ところが翌日、楊はその人事を翻した。それに対して吉田が激怒する(健康と長寿の会、1981、5-6)。渋谷(楊)は当時を振り返りながら、おおらかな楊が吉田の押しの強さに一度は賛意したもの、翌日、新人事案で更迭させられる当人を前に情が入って辞めろとはいえなかったのではないかと推測する²⁷⁾。

本稿では楊の太極拳を日本独自の太極拳として評価しているが、当時の人々がこのような視点で彼の太極拳を見つめていたかは分からない。少なくとも中国の太極拳(伝統拳・制定拳)と楊の太極拳が異なる側面が多いということは吉田においては否定的な印象を与えた可能性が強い。また、吉田の後援者としての自負は時として、楊の組織への過度な干渉となった点も否めない。太極拳をめぐる認識、そして、組織に対する立ち位置など、両者の考えが微妙に食い違っていたということは考えられる。

その後、6月の『健康と長寿』誌に楊の太極拳への批判記事が掲載され(日本健康太極拳協会、2010、179)、それにより楊名時八段錦・太極拳友好会は健康と長寿の会と「別行動」というかたちで脱退に至った(同、192)。続いて7月に『健康と長寿』誌は臨時号として楊の太極拳が持つ独自性や組織運営の方針など、一冊丸々楊を批判する内容のものが刊行され、吉田は強い筆致で楊を非難した(健康と長寿の会、1981)。

激怒した吉田を鎮めるため、楊は渋谷(楊)と謝罪の手紙を書いたが、渋谷(楊)の証言に拠れば結局は送付しなかったという²⁸⁾。しかし、実際は吉田の手元には楊からの手紙が届いている。手

紙冒頭を引用する。

雑誌の件 ものいえばくちびるさむし。 / ……第 1 回健康と長寿の会、以来、吉田先生にはお世話になっている。 / 人様の健康と長寿を願っている。 / 友の会(友好会)の機関紙として健康と長寿誌を定めた。今回、私をひぼうする記事がでたのは残念である。皆もショックだろうと思う。 / 和して同ぜずでゆきたい。 / 考違いのもとになった、健康と長寿をやめて、太極という雑誌を機関紙とする。長いあいだお世話になりましたが、今回をもって健康と長寿の会からぬける。 / 今後は、名古屋の人達が中心となってやってほしい。 / なぜ、吉田誠三先生がこれほどいかっていられるのかわからない(健康と長寿の会、1981、11)。

日本語文章としてたどたどしさがある点を考えれば渋谷(楊)と書いた手紙ではない可能性が高く、渋谷(楊)と手紙を書いた後、改めて楊自身で自身の気持ちをしたためたものを吉田に送ったと考えられる。文面からは楊の心理的混乱が伺える。上記引用以外の手紙文面では「先生を今後とも友としたい」としつつも「吉田さんが私を育てたというのはまちがいだ」、「人に恩きせがましくゆうマアことはまちがいだ」、「私は吉田先生を人としてえらびそこなった」と矛盾した感情を吐露している(健康と長寿の会、1981、12)。

この手紙とともに、楊側の人間と吉田側で押し問答になったこともあり、余計に吉田を感情的にさせる結果となった。この騒動の渦中、東京の雑誌記者が吉田側に接触し²⁹⁾、同年 11 月に『週刊文春』で『健康と長寿』と同種の楊へのバッシング記事が掲載されるに至った(日本健康太極拳協会、2010、179)。

日本太極拳協会を去った楊をサポートしたの

が吉田であった。しかし、吉田との間に亀裂が走り、両者は決別してしまう³⁰⁾。健康と長寿の会との関係は 1972 年に始まり、1977 年の機関誌の紙面提供から本格化し、1981 年 6 月をもって終わった。楊にとっては 50 歳から 57 歳までの出来事であった。

結果的にこの事件以後、楊名時八段錦・太極拳友好会と健康と長寿の会は「別行動」をすることになり、楊名時八段錦・太極拳友好会は独自の機関誌「太極」を発行し、独り立ちすることになったのである。こうして、独自の組織・独自のメディアを持つ楊名時の太極拳団体が完成することになった。

V 結論

これまで、楊名時という中国語教師が太極拳の指導者として世に出て自身の組織を持つまでの経緯を追ってきた。ここまでの内容を整理したい(表 1 参照)。

1960 年代、楊は家族を養うため、中国語教師として働いていた。空手などの武術に興味を持っていた楊は幼少期に学んだ太極拳を自身の養生のために 1 人、実践していた。中国語の授業の中で太極拳や気功という養生法を見せて周りを和ませ、授業後に文化学習のようなかたちで学生たちとともに太極拳を実践していた。楊、そして、日本健康太極拳協会は、楊の太極拳の端緒を 1960 年のアジア・アフリカ語学院としているが、本稿ではもう少し厳密に、かつ幅広く 1963 年頃のアジア・アフリカ語学院など、彼が勤めた中国語の教室として理解したい。中国武術の素養を持つ、空手好きの中国語教師、それが当時の楊であった。

そんな楊は日本空手協会の鏡開きで太極拳を披露する。これが縁となり日本武道館で太極拳を指導することになる。武術を教えること、まして、長らく本国との競技者とも交流していない中、

表 1 楊名時の太極拳普及初期の活動

年月日	年齢	出来事
1957年12月	33	東京中華学校退職 1958年-1966年の8年間、中国語の非常勤講師として各校で勤務
1963年4月	39	アジア・アフリカ語学院非常勤講師着任 この頃、授業の延長で太極拳を学生と練習
1964年頃	40	渋谷麻紗、善隣書院での楊の「何か」を目撃 この頃、中国語の教室で太極拳や気功を披露か
1966年4月	42	大東文化大学講師着任
1968年1月	44	後樂園卓球センターでの日本空手協会鏡開きに参加し太極拳披露
1968年3月	44	日本武道館に楊名時の太極拳記事。このころには職員向け教室が開始
1968年5月	44	新聞記事に楊名時の教室。このときには「太極拳研究会」となっており、一般公開が始まっていたことが伺える。
1969年8月	45	日本太極拳協会発足。「師範」に
1972年	48	「健康と長寿の会」第1回大会
1974年5月	50	朝日カルチャーセンターでの教室開始
1974年6月	50	日本太極拳協会からの訪中団。その後、楊名時、同協会を脱退
1975年1月	51	「楊名時八段錦・太極拳友好会」発足
1980年	56	「楊名時八段錦・太極拳友好会」中国の旅
1981年6月	57	吉田誠三との間で諍い。「楊名時八段錦・太極拳友好会」は「健康と長寿の会」と「別行動」となり、機関誌「太極」を刊行

自流で形作っていた太極拳をどう教えるか。楊は幼少期の学習体験をもとに、現在の健康太極拳のパッケージを形作っていった。健康太極拳の中核を楊名時独自の簡化太極拳及びその稽古システムと考えるなら、それらが確立され、なおかつ彼自身が太極拳指導者として人前に登場した 1968 年の日本武道館を健康太極拳の誕生の瞬間であったと理解することができる。

期せずして日本武道館に本拠地を置く団体の技術トップとなった彼は稽古場を切り盛りしながら、教室を増やしていった。しかし、日中国交正常化に伴い、中国からの情報が流入し、中国政府とのパイプが重視される中で楊の独自性の強い太極拳は否定され、日本武道館から退却させられることになった。

日本武道館を去った楊はカルチャーセンターを拠点としながら実践者を増やしていき、周囲の人々ともに楊名時八段錦・太極拳友好会を立ち上げた。後援者の一人吉田によって、『健康と

長寿』誌の紙面が提供され、機関誌「太極」が発刊され、組織化は進んだ。しかし、組織人事をめぐる対立などにより、楊と吉田は決裂し、『健康と長寿』誌から「太極」は独立することになる。

こうして自律した組織と機関誌を持ったとき、楊は太極拳指導者として完全に独立することになったのである。この年が 1981 年であるから、中国語教師・楊名時が太極拳指導者・楊名時、あるいは協会の表現を借りれば「楊名時太極拳師家 楊名時」として完全に独立するまでには 20 年近い歳月を要したということが伺える。1960 年代の中国語の教室で披露した太極拳(30 代から 40 代半ば)、1970 年代前半の日本太極拳協会師範 楊名時の太極拳(40 代後半)、1970 年代後半の健康と長寿の会にサポートされた楊名時の太極拳(50 代)、そして、1981 年以降の独立し自律した楊名時太極拳＝健康太極拳(60 代から 80 代まで)という時系列がここに見えてくる

のである。

興味深いことに、日本武道館を去ったことも吉田と袂を分かったことも、結果的に「楊名時太極拳師家 楊名時」の形成に資するものがあったということである。この 2 つの別離はそれぞれで楊が発した「和して同ぜず」のフレーズが示すように、楊名時という人物を中心として形成された独自の太極拳世界が他の団体、太極拳に「同ぜず」に自律していくためのプロセスであったと考えられるのである。

本稿では従前、「1960 年」とされた健康太極拳の端緒を資料等の精査から 1963 年頃であったこと、また、楊自身が 1967 年と勘違いしていた日本武道館での稽古始めを 1968 年であったことを明らかにした。さらに現在では存在しない日本太極拳協会や健康と長寿の会での活動や関係などを資料と当時を知る人々の証言から明らかにした。本稿の検討により、楊名時が独自の太極拳を確立していくプロセスが提示された。これにより、日本養生史における、日本独自の健康太極拳の誕生と発展経緯が明らかにされた。さらに戦後昭和史において活躍した様々な団体や人物が楊と関わっていたことが見えてきた。そこに垣間見える太極拳や気功を中心とした運動法の発展に貢献した人々の交流と連携は 1960 年代から 1980 年代にかけての昭和養生史を検討する取り掛かりとして重要であると考えられる。昭和養生史を紐解き、その中に改めて楊らの貢献を検討するためにも、これらの人々の交流と連携の全容は今後の課題としたい。

注釈

1) 楊の太極拳と一般的な太極拳とを比較すると多くの違いが見受けられる。分かりやすいものでも服装（楊：空手着、一般：カンフースーツなどの中国服）、種目（楊：独自の簡化 24 式太極拳のみ、一般：多くの套路。刀や剣を用いるもの）などがある。太極拳思想の観

点からは競技性の否定が挙げられる。一般的な太極拳ではスポーツ化が進み、競技としての太極拳が求められる中で、楊は太極拳の競技性を否定しており、競技大会などは彼の組織では実施していない。この競技性の否定の代わりに強調したのが太極拳の養生面である。楊は太極拳を競技ではなく健康ための養生法として理解し、それを基本として自身の太極拳思想を形作っていった（蒲生、2017）。これらの特徴はその後、日本健康太極拳協会等に受け継がれるが、楊独特の身体技法（身体の用い方）の継承はまちまちである。楊の動きは太極拳の特徴であるゆったりとした連続性のある動きとは違い、空手的な強弱のついたものになっており、太極拳としてはかなり独特なものである。これらの点については今後、改めて映像資料を用いた質的検討や実践者のインタビューなどを用いて、健康太極拳の楊名時以後の発展として検討していきたい。

2) 日本健康太極拳協会では自身の太極拳を「楊名時八段錦・太極拳」と呼んでいるものの、協会関係の出版物では「健康太極拳」と称しているものが多い（楊、2007 など）。本稿では中国政府が編纂し、普及の中心となっている武術太極拳に対して健康太極拳を位置づけるため、この呼称を用いている。ちなみにここでの八段錦の読み方は「ハチダンニシキ」であり、気功実践で一般的に用いられる「ハチダンキン」という読み方とは異なる点に注意したい。参照：日本健康太極拳 HP「楊名時八段錦・太極拳について」

<https://www.taijiquan.or.jp/youmeiji>

確認：2016 年 1 月 5 日

3) 帯津良一「場」の養生塾 HP

<http://www.karadahouse.com/obitu/facilities.html> 確認：2017 年 1 月 29 日

4) 楊はこの学校を「東亜高等学校」と呼び、「旧制高等学校」としていたが（楊、2001、71-75）、

この学校はいわゆるナンバースクールとしての旧制高等学校ではない。東亜学校はもともと、中国からの留学生の予備教育を行う私立の語学学校であったが、のちに「高等学校令」に準拠した高等科が新設され、実質的には高校の役割を果たした(韓、2012)。東亜学校で楊を教えていた生物学者の湯浅明は「旧制高等学校の生物学の教師として、氏に生物学を教えました」としている(湯浅、1973、3)。このように、当事者である教師や学生がこの特殊な学校を旧制高校として捉えていたことが伺える。

- 5)学校側の記録では楊が同校校長を務めたのは1953年10月から1956年12月となっている。東京中華学校「歴代の校長」

<http://tcs.or.jp/about/principals/>

閲覧：2017年1月15日

- 6)戦争で「学業が満足にできない心のいらだちや、食べ物の貧しさなどの苦悩に遭遇してみて初めて、幼いときから身につけてきた太極拳の存在が大きく見えてきました。呼吸を整え、心を静めてゆったりとした動きに身を任せていると、無我の境地が訪れます。そしてそのあとには、さわやかに本来の自分が甦ります。私は日本人の誰もが辛かったこの時代、太極拳によってどんなにか救われたことでしょう」(楊、2001、140)。

- 7)この写真は日本太極拳協会の資料などによく引用されている。その際は、「アジア・アフリカ語学院の1960年代の合宿風景として紹介される(日本健康太極拳協会、2010、203)。「合宿」というが太極拳の合宿ではなく、中心は語学研修である。

- 8)楊麻紗(1943-)。楊の初期からの弟子であり、楊が先妻と死別後、再婚。楊の死後は楊家養心太極拳を主宰(楊家養心太極拳 HP

<http://www.taikyokuken.jp/index.html>

閲覧：2017年1月15日)。生年については、

渋谷、2011 参照。太極拳の指導者としては「渋谷麻紗」名義の時代が長く、現在でも俳名には「渋谷」を用いている。本稿では、「楊」との混同を避けるため、当時の姓を用いて「渋谷(楊)」と表記している。渋谷(楊)は、楊が非常勤の中国語教師として活動していた時期から、長らく彼の秘書的役割を担っていた。本稿では渋谷(楊)の聴き取り調査が中心となっており、史料としてやや偏りを感じられるかもしれないが、楊の初期の活動を理解するためには彼女の証言が唯一の資料である場合が多く(当時を証言できる人物が彼女しかいない場合があり)、ご理解いただきたい。

- 9)2015年3月24日 楊麻紗氏 聴き取り調査。場所は東京都千代田区学士会館近くのファミリーレストラン。音声データ118分に収録。

- 10)日刊スポーツ 1968年1月8日11面 掲載

- 11)2015年3月24日 楊麻紗氏 聴き取り調査。

- 12)2017年5月12日 楊麻紗氏 電話での聴き取り調査。2015年8月頃に当該資料を送付した際、資料に関する情報を得た。聴き取り調査では音声録音からトランスクリプトを作成するが今回は情報を書き留めるだけだった。その際、通話した日時を控えることを失念しており、改めて2017年5月12日に聴き取った内容について確認した。

- 13)2015年3月24日 楊麻紗氏 聴き取り調査。

- 14)1968年5月20日 毎日新聞朝刊

- 15)2015年3月24日 楊麻紗氏 聴き取り調査。

- 16)2015年3月24日 楊麻紗氏 聴き取り調査。

- 17)「故楊名時先生のエピソード(13) 八段錦の膝の屈伸」 楊家養心太極拳 HP

<http://www.taikyokuken.jp/topics.html>

閲覧：2017年1月15日

- 18)「故楊名時先生のエピソード(1) 出会い」 楊家養心太極拳 HP

<http://www.taikyokuken.jp/topics.html>

閲覧：2017年1月15日

- 19)『楊名時太極拳 40 年史』(日本健康太極拳協会／楊名時八段錦・太極拳友好会、2000)では日本太極拳協会の資料(役員簿)が掲載されているものの(p.47)、説明が抜けており、それがどのような組織の資料かは分からないようになっている。
- 20)当時の書籍では 1973 年発行の書籍では日本武道館教室が木曜と金曜、平和相互銀行での稽古が土曜、虎ノ門の会場では水曜と木曜、抱一龕空手道場では火曜と金曜となっている(楊、1973、186)。
- 21)2015 年 4 月 20 日 中野完二氏 聴き取り調査。場所は東京都千代田区学士会館内バー→日本食レストラン。食事をしながらのインタビュー。音声データ 66 分に収録。
- 22)2015 年 3 月 24 日 楊麻紗氏 聴き取り調査。同じ話は楊家養心太極拳サイトにも記載されている。「故楊名時先生のエピソード(8) 和して同ぜず」楊家養心太極拳 HP
<http://www.taikyokuken.jp/topics.html>
閲覧 : 2017 年 1 月 15 日
- 23)2015 年 3 月 24 日 楊麻紗氏 聴き取り調査。
- 24)楊、1971 のまえがきでは「私の家は代々太極拳を伝える武門」とし本文では「楊家太極拳」を紹介し(132-136)、「著者紹介」では「楊家太極拳の正統の使い手」となっている。
- 25)2014 年 6 月 19 日 二宮恒夫氏 聴き取り調査。二宮氏は吉田誠三の病院に勤めている事務方で当時より吉田の秘書的役割を担っていた。場所は愛知県名古屋市の吉田病院の 1 室。音声データ 130 分に収録。
- 26)2014 年 6 月 19 日 二宮恒夫氏 聴き取り調査。
- 27)2015 年 3 月 24 日 楊麻紗氏 聴き取り調査。
- 28)2015 年 3 月 24 日 楊麻紗氏 聴き取り調査。
- 29)2014 年 6 月 19 日 二宮恒夫氏 聴き取り調査。
- 30)その後、吉田は 1983 年に亡くなり(健康と長寿の会、1084)、『健康と長寿』は吉田誠三の息子で病院を継いだ洋が発刊を続けていたが

(蒲生、2016)、2000 年、廃刊を迎えた(健康と長寿の会、2000)。

引用文献

- 中華人民共和国体育運動委員会(日本太極拳協会訳)(1977) 太極拳運動. 不昧堂出版、東京
- 中国・国家体育総局健身気功管理センター[編]、楊名時・帶津良一[日本語監修](2004) 健身気功新功法シリーズ(『六字訣』林茂美訳・『八段錦』橋逸郎訳・『五禽戯』津村喬訳・『易筋経』楊進訳). ベースボール・マガジン社、東京
- 蒲生諒太(2016) 吉田誠三の予防医学思想と「健康と長寿の会」. 統合人間学研究 (1) : 105-118.
- 蒲生諒太(2017) 「和」の太極拳——楊名時の太極拳思想について. トランスパーソナル心理学／精神医学 16(1) : 145-160.
- 韓立冬(2012) 東亜学校の中国人留学生予備教育——特設予科との関係を中心に. 年報地域文化研究 (16) : 45-73.
- 笠尾恭二(2000) 中国拳法伝——新たなる拳法史観のために. 福昌堂、東京
- 笠尾恭二(1994) 中国武術史大観. 福昌堂、東京
- 健康と長寿の会(1981) 健康と長寿. 昭和 56 年特別臨時号(1981.10)
- 健康と長寿の会(1984) 健康と長寿. 昭和 59 年 2 月号
- 健康と長寿の会(2000) 健康と長寿. 平成 12 年 12 月号
- 菊地俊介(2004) 認識・イメージ——日本占領下華北における在留邦人の対中国認識. OUGC ブックレット (3):271-293.
- 黄耐之(永富博道訳)(1986) 古伝太極拳. ベースボール・マガジン社、東京
- 李自力(2009) 日中太極拳交流史. 叢文社、東京
- 李天驥(李徳芳訳編)(1994) 簡化 24 式太極拳.

- ベースボール・マガジン社、東京
- 毛沢東（山村治郎訳）（1964） 体育の研究. ベースボール・マガジン社、東京
- 松田英子(1987) 太極拳と私. 日本中国友好協会太極拳委員会 太極拳の歩み——太極拳普及 10 周年記念誌 : 13-18.
- 松田隆智(2001) 図説 中国武術史. 壮神社、埼玉
- 三浦英夫(1979a) 美と心と健康の太極拳. ひかりのくに、大阪
- 三浦英夫(1979b) 太極拳健康法. 立風書房、東京
- 三浦英夫(1980) 日本太極拳 15 年のあゆみ 全日本太極拳協会. 太極 1980 薫風号(日本太極拳学習 15 周年記念) : 2-4.
- 永富博道(1995) 白狼の爪跡——山西残留秘史. 新風書房、大阪
- 永富博道(1986) 訳者の言葉. 黄耐之(永富博道訳) 古伝太極拳. ベースボール・マガジン社、東京 : 5-8.
- 奈良雅之・小林紀明・刀根洋子・堤千鶴子・安齋ひとみ・吉田由美・糸井志津乃・風間眞理・鈴木祐子・川田智恵子・原彰男・五十嵐美和・渡邊明美・阿部八千代(2013) がん療養者に対する太極拳の効果に関する最近の研究動向. 目白大学健康科学研究(6) : 1-6.
- 日本武道館(2015) 公益財団法人 日本武道館 50 年史
- 日本健康太極拳協会／楊名時八段錦・太極拳友好会(2000) 楊名時太極拳 40 年史
- 日本健康太極拳協会／楊名時八段錦・太極拳友好会(2010) 楊名時太極拳 50 年史
- 大平雅子・戸田雅裕・田麗・森本兼曩(2010) 太極拳が精神的・身体的健康度に及ぼす効果. 日本衛生学雑誌(65) : 500-505.
- 大滝ママー雄(1972) 太極拳入門. 地歴社、東京
- 帯津良一[監修](1993) ホリスティック医学の治癒力. 法研、東京
- 帯津良一・チャン、アグネス(2016) がんに負けない太極拳養生法. 旬報社、東京
- 王英儒(編訳)(1976) 楊式太極拳体用法. 昭和出版、大阪
- 笹原千穂・松原三智子(2016) 太極拳が中高齢者の健康に及ぼす効果についての文献検討. 北海道科学大学研究紀要 第 42 号 : 25-31.
- 孫皎・佐々木順子・大木秀一(2011) 太極拳の実施が認知機能に与える効果に関する文献レビュー. 石川看護雑誌 Vol.8 : 103-108.
- 渋谷麻紗(2011) 渋谷麻紗句集 寒晴. 角川書店、東京
- 田中剛(2003) 日本敗戦前後の中国人留日学生政策. 森時彦編 長江流域社会の歴史景観——京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告. 京都大学人文科学研究所 : 235-263.
- 津村喬(1990) 気功への道. 創元社、大阪
- 津村喬(2011) 健身気功入門——ころとからだを養生する. 春秋社、東京
- 津村喬(2014) ヘルシンキでの津村気功活動——50 周年記念講習での記念講義. 気功文化 2014 年 8 月 20 日号 NPO 法人気功文化研究所 : 1-12.
- 津村喬[編]・帯津良一[監修](2004) 実践 伝統四大功法のすべて. 学研パブリッシング、東京
- 楊名時(1968) 中国古来の「太極拳」. 機関誌「武道」 59 号(1968 年 3 月 1 日) : 63-65.
- 楊名時(1971) 太極拳——中国八億人民の健康体操. 文化出版局、東京
- 楊名時(1973) 中国式健康術—3 分でできる太極拳入門 八段錦. 主婦と生活社、東京
- 楊名時(1980) 太極拳の心. 海竜社、東京
- 楊名時(1995) 「夢即是無、無即是夢」の人生. 外国語学会誌 (25) : 1-4
- 楊名時(2001) 太極——この道を行く. 海竜社、東京
- 楊名時[著]/中野完二[編](2004) <太極> 巻頭

文集. 日本健康太極拳協会
楊名時[監修]/楊進・橋逸郎[著](2000) 健康太極拳規範教程. ベースボール・マガジン社、東京
楊名時・吉田誠三(1977) まさつと呼吸健康法. 文化出版局、東京
楊名時・渋谷麻紗(2004) ドクター帯津良一がすすめる 50 歳からの楊名時健康太極拳. 海竜社、東京
楊慧・楊玲奈(2007) DVD ブック だれでもできる楊名時太極拳. 山と溪谷社、東京
楊慧(2007) DVD で覚える健康太極拳 楊名時 24 式. 新星出版社、東京
楊進・橋逸郎[著](2011) 新版 健康太極拳規範教程. ベースボール・マガジン社、東京
湯浅明(1973) まえがき. 楊名時 中国式健康術——太極拳入門：八段錦. 主婦と生活社、東京：3-5.
財団法人 アジア・アフリカ文化財団創立 50 周年記念誌編纂委員会(2008) 革新と創造——アジア・アフリカ文化財団創立 50 周年記念誌 [本文中での表記：50 周年記念誌]

謝辞

本稿のもとになる研究に際し、聴き取り調査へのご協力及び資料のご提供を頂きました楊麻紗先生（楊家養心太極拳）、中野完二先生（日本健康太極拳協会）、二宮恒夫先生（吉田外科病院）には深謝の意を表します。

また、資料のご提供を頂きました楊慧先生、楊玲奈先生、新井隆一郎先生、村上巖先生（以上、日本健康太極拳協会）、石原恒治先生（カルチャースペース元氣！）、丸山至先生（日本中国友好協会）、アジア・アフリカ語学院（とくに図書館司書の佐藤万矢子さま）の皆様にも心より感謝申し上げます。

最後に、日本での太極拳・気功普及の生き字引として研究に関するご助言を頂きました松村

健市先生、学会発表を通じて適切なコメントを頂きました日本養生学会の皆様、査読者の先生方、朝日カルチャーセンター中之島教室にて健康太極拳をご指導頂いております鳴尾知子先生、玉森幸一先生、村上先生に感謝の意を表します。

2017 年 3 月 6 日受付

2017 年 6 月 4 日受理

気功練習における初心者の 非言語・身体コミュニケーション

—映像を用いた質的分析と省察—

武者小路澄子¹, 加藤敏弘², 遠藤卓郎³

Non-verbal and Interactive Bodily Communication of a Beginner Learning Qi-gong

: A Qualitative Study of Visual Data and Its Reflexivity

Sumiko Mushakoji, Toshihiro Kato, Takuro Endo

Abstract

In qualitatively analyzing the visual data, we study how a beginner of Qi-gong learns to behave non-verbally and interactively, and makes shift with an experienced practitioner of Qi-gong to be able to get well with performing ‘Taiki’ properly. Taiki is a sort of exercise, which is regarded as ‘the communication of qi’, wherein a pair of two persons exchanges ‘qi’, i.e., the force that is regarded as life energy. Two video recorders were situated in the hall where 12 pairs constituted with beginners and experienced practitioners practice Taiki. When each of the pairs practices Taiki, the visual data, i.e., (1) those of full-length pictures of each pair practicing Taiki and (2) those of the upper half parts of their bodies, were recorded. These video data were analyzed in terms of their non-verbal communication and interactional synchrony, as well as their verbal communication.

In examining through the recorded scenes, it appeared that the beginners radically changed their non-verbal behaviors, from the first stages when they began to learn how to do in the first place, to those they seem to get through performing Taiki properly and start to enjoy it: in the world of qi-gong practicing members, those changes may be called as those wherein the beginners started to work with ‘qi’, instead of their physical (bodily) strength.

Among these visual data, those of a beginner-and-experienced pair, who practiced 13 sets of Taiki were selected and analyzed with eleven elements of non-verbal communication and interactional synchrony. At the same time, however, this study focuses on its methodological (reflexive) issue as well: in qualitative visual analysis, especially when it was pursued by the researchers who are also members of the field (in this case, *us*), whether the analysis itself is pursued *with the inside members’ sight* (in this case, with the ordinary world of qi-gong) or *with the outsider’s researcher’s sight*, faces a critical situation. Since this kind of crisis is inescapable when studying the bodywork wherein the invisible bodily senses *count*, the study simultaneously

includes the examination of this insider/outsider issue, in examining what can be observed within the data, and takes a *reflexive turn* within itself. Analyzing the data always with some assistants who did not participate in the field and have no knowledge and experience of qi-gong, and obtaining the results only when all the analyzers observe the scenes in the same way, we try to keep the analysis inter-subjectively, if not objectively. Moreover, taking a way of ethnographic writing, this study reflects *the Other's* interpretation, which opposes what can be observed to the analyzers' and assistants' interpretation, and reanalyzes its own results including the opposed interpretation. This reflexive approach further leads us find out an essential phase of the beginner's ongoing learning of bodily communication of Taiki. Visual analysis of body works and techniques, such as the one of qi-gong, affords lots of possibilities in researching direct and deep investigation of what takes place in the field, though it unavoidably gets embroiled in some difficulties with such insider/outsider issues as the one in this study: taking a reflexive approach is intrinsic in constituting the bases of reliable and appropriate research methodology in pursuing the study of Life Awakening Arts.

1: bird sanctuary research institute 電子メール: blackbird-13@nifty.com

2: 茨城大学(Ibaraki University) 水戸市文京 2-1-1

TEL : 029-228-8266 電子メール: toshihiro.kato.bsk@vc.ibaraki.ac.jp

3: つくば気功研究所(Tsukuba Qi-gong Center) 電子メール: z.enshouan.z@gmail.com

I. はじめに

気功においては、“気”を通して自らの「命の営み」と言える何らかの感覚や、自らと他者や環境との繋がりに気付き、“気”を巡らせてゆくという修練が行われる(遠藤、2002; 津村、1993; 武者小路ら、2009)。これまで著者らは、こうした感覚や繋がり、巡りに着目してきた。そして、コミュニケーションを「対象と何らかの共有をしていく過程」と定義した上で、これらをコミュニケーションという切り口から探究しようと試みてきた(武者小路、2009; 武者小路ら、2010; 武者小路ら、2011; 武者小路ら、2011)。こうした研究においては、“気”という現象の科学的解明ではなく、気功練習の当事者たちにとっての“現場で生じていること”の詳細を質的研究によって明らかにすることを目指した。そのために、気功練習の現場を観察し、またそれらを録画・録音した。更に、当事者たちへのインタビュー調査等を行い、これらをデータとして当事者たちにとっての“現実”がいかに構成されているか^{註1)}を分析した。

本研究では、気功の練習のうち、対気を中心に研究している。対気は二人組で行う気功の技法の一つで、西野流呼吸法の創始者西野皓三が「手の甲と手の甲を合わせる格好で『気』を交流させる」「エネルギーのコミュニケーション」(西野、1993)と説明しているものである。この対気に焦点を当てて当事者たちが感じたり考えたりしていることを調査することから、“対気という現場の現実”としてのコミュニケーションの多様性が明らかになってきた(武者小路、2009)。当事者たちは対気の現場で相手や周辺的环境・世界とコミュニケーションをしていると感じており、それは多様な範囲やレベルに渡る。また、そこで生じたことが彼らの身体観や世界観に広がりや意味をもたらすものである

ことが推察された。対気の型ややり方には、指導者や流派などによって様々なものがあるが、本研究では、二人で組みとなり合わせた手で互いに<押す><押される>^{註2)}を繰り返した後、<飛ばす>側にいる者が相手を“気”で<飛ばす>という練習を取り上げた。

これまでの調査において、顕著な特徴として捉えられたことの一つに、初心者が気功練習を始める際、例え一回の練習においてもその最初と最後とを比べると大きな変化を遂げる場合がある、ということがある(武者小路、2009)。相手を<押す><押される>:<飛ばす><飛ばされる>という行為をする中で、練習の最後になると、単純に筋力を使ってこれらの行為をするのではなくなることが度々観察される。時には初心者が、熟練者同士の対気で観察できるような“相手を感じるやり方”“相手へ働きかけるやり方”を身に付けて、“気の交流”のやり方を学び取ったかのように見て取れることも起こる。こうした変化をどのように観察・分析できるだろうか。また、そこに初心者のどのような変容を見出すことができるのだろうか。知識としても身体技法としても気功については初心者である人が、“対気ができる”ようになるために習得していくことの詳細を理解することは、気功とは何かを探る研究の基盤として意味をもつと考える。本研究では、こうした初心者の対気練習における変化を、その非言語コミュニケーションと身体コミュニケーションの観察と分析を通して探った。具体的には、初心者の練習現場を観察・録画し、その映像データの中からこうした変化が見て取れる場面を選んで、詳細な質的分析を行った。養生学で扱う主要な身体技法の一つとして気功を捉えるならば、その習得過程の一端が明らかになることは重要であると考

える。

この質的研究を行うために、並行してもう一つの検討と考察を行う必要があった。それは、身体技法を習得する現場を対象に映像分析を行う際の研究方法論の検討と考察である。

映像分析は、人々の活動を瞬間毎に捉え、それにまつわる社会的側面を繰り返し精査することを可能にする(Heathら、2010)。ビジュアルなデータは、現場のある瞬間に焦点を当て、その場の空間や事物の関係性、そしてとりわけ人間の身体の有様、身体知の問題を可視化することが出来る(秋田、2013)。そのため、映像分析は養生学にとっても大きな可能性を提示するものとなろう。だが一方で、映像を扱うことには注意を払う必要のある問題もある(Heathら、2010; 秋田、2013; 山崎ら、1997; BallとSmith、1992)。本研究では、気功の現場を映像に撮って、そのデータに基づいて“現場で生じていること”を解釈していった訳だが、研究方法論上の問題の一端を検討せざるを得なかった。

何よりもまず、著者らは全員、気功の練習を当事者として日々行っているという側面を持っている。本研究で取り上げるデータの元となった現場でも、当初から気功練習の当事者(熟練者)として初心者の変化を目の当たりにしてきた。そして、複数の初心者との対気練習において録画した膨大な映像の中から、最も“典型的”かつ“重要な”変化を遂げていることが見て取れる映像データを分析対象として選択した(即ち、その典型性や重要性は著者らが当事者として判断した)。映像の分析は、当事者のそれに偏りすぎないよう、必ず気功についての経験も知識を持たない第三者と共に分析を行っている。それでも、著者らが長年当事者として気功に馴染んでおり、当事者として主観的・間主観的に現

場に参与している「インサイダー」でありつつ研究に従事していることが“恣意性”として研究成果に影響を与える可能性があることは確認しておくべきことである。

研究者が「インサイダー」、現場の当事者でもあるということは、現場と密着して、そこでの日々の活動が自然に営まれている形でデータ収集をし、当事者の立場から捉えた“現実”に密着した解釈を行うことを可能にする。一方で、当事者(インサイダー)ではなく調査者(アウトサイダー)として、映像データから“現実”を読み取り解釈する際、当事者(インサイダー)と研究者(アウトサイダー)とのはざまに立ち、“現実”を解釈・再解釈するリフレクシヴな(reflexive; 反省的な)視点に常に立つ必要が生じる^{註3)}。

本研究では、いったん分析を終えた時点で、映像データに関して異なる背景知識を持っている完全なアウトサイダーに映像データを提示したところ、別の読み取り・解釈をされた見解を頂戴した。そこから、映像分析においては、データの読み取り・解釈をする際に、どのような背景知識^{註4)}に基づいているかによって読み取り・解釈が多様となってしまうことが浮き彫りになった。そうしたエピソードをエスノグラフィーとして取り上げて、検討を行い、これを統合した再解釈を行うこととなった。このように身体技法の映像分析の方法や方法論を検討し、その可能性を提示することは、今後の養生学の方法や方法論を展開していく際の一助となると考える。

II. 気功練習における初心者の変化

気功練習の現場において初心者はどうのような変化を遂げるのであろうか。言うまでもなく、対気を習う初心者にとって肝要なことは“対気のやり方を学ぶ”ことである。それは、組となった相手と手で<押す><押され

る>という基本的な動作一つとっても、様々な押し方の試行錯誤を繰り返し、最終的に“きちんとした対気となっている”という確認を指導者から得て、それを継続し展開していくような形となっていく(武者小路、2009)。第I章で述べたように、初心者が気功練習を始める際、例え一回の練習においてもその最初と最後とを比べると大きな変化を遂げる場合がある。それは、相手とのやりとりが次第に筋力を使って単純に行うものではなく、時には熟練者同士で観察できるような“相手を感じるやり方”“相手へ働きかけるやり方”を身に付けていくような変化である。

こうした変化は、著者らが気功を練習する当事者として感じていることである。これを当事者により近い用語で述べるなら、「筋力による<押す><押される>:<飛ばす><飛ばされる>から、“気感”による<押す><押される>:<飛ばす><飛ばされる>に変わる」ということになる。対気では、向き合った二者が両者とも片足を踏み出して、互いの手を合わせ、<押す><押される>を繰り返す。その動作は足を踏み込みながら手で押すといった形をとるが、気功の当事者たちはこれを(実際は、手で押すのではなく、)

“丹田で押し合う”あるいは(熟練してくると)“自分の気や自分を通しての天地の気等で相手と触れ合う”と捉えている。更に、この様にして相手と、<押す><押される>を繰り返し、ある時点になると、両者のうち<飛ばす>側に立つ者が相手を後ろに飛ばすという動作が入る。この<飛ばした>時点で、一回の対気が終了する。どのような時点で、何故<飛ばされる>のかは、気功経験者によっても違い、そこで感じていることも異なると考えられる。敢えて著者らが当事者として推測するなら、“相手と繋がり”<押す><押される>を繰り返していくと、“気が充実

してくる”時点があり、その“気”を押し流す形で<飛ばす>場合があるが、そればかりでなく、飛ばそうという意図なくしても“何かが起こって”相手が<飛ばされる>等の反応が起こる場合もある。

対気練習を始める時点で、初心者はこうしたことについての経験を持たない。従って一般には、この<押す><押される>:<飛ばす><飛ばされる>といった動作に伴う“丹田の感覚”や自らや相手の“気の巡り”などに対する身体感覚や身体知を持つことについて意識化していることもない。少なくとも著者らが気功当事者として初心者を相手にする時は、型通りの動きから入りはするが、まずは、筋力で押すのではなく、“丹田の感覚”や“自らの気と相手の気”を感じ取るようにからだ^{註5)}で働きかけたり、適切な言葉を添えたりしていくのが一般的である。初心者は“気”について意識化していなくとも、初心者のからだはそれに反応したり感じ取れていたりするため、その反応や感じ取りを促していく。初心者は、当初は手で相手を押そうとするが、次第に自らの感じたことやからだの反応について促されたことから筋力ではない<押す><押される>:<飛ばす><飛ばされる>技法を身に付けてゆく。同時に、動きの感じ方や、相手と自分の感じ方から気付きを得て、内的な感覚を深めてゆく。

しかし、こうした主観的・間主観的体験を実際に初心者の行動の詳細からどの程度観察できるのかは明らかではない。ここでは、一端当事者(インサイダー)の立場をはずれて眺めるための視野を探り、初心者が対気の練習を行う映像の一例から非言語・身体コミュニケーションを詳細に分析したい。

Ⅲ. 研究方法

本研究では、対気の練習を行っている現場

を映像に記録し、映像の分析を通して対気練習における初心者の非言語・身体コミュニケーションの詳細を明らかにしていく。その際に、第Ⅱ章で推測した変化を予め仮定し、それを確認することだけに焦点を当てた分析は行わない。むしろ、初心者が練習を開始した段階と練習を終了する段階との、非言語・身体コミュニケーションの諸要素を一つ一つ具体的に比較し、比較から見出せることを統合していく形をとる。更に、気功の知識も経験もない第三者に分析補助を依頼し、彼らを含めた全員が一致した解釈を結果として扱うことにする。こうした手続きを採ることによって、具体的な分析結果に基づいて、著者らが当事者として捉えていたことと異なることや新たなことをも発見していくことを期待したい。また、映像データについての異なった読み取り・解釈をエスノグラフィーによって紹介し、これを分析結果に統合する考察を行う。以下で、調査方法と映像の分析方法、結果を提示する上での主要な課題について説明する。

1. 調査方法

(1) 現場の設定と背景

今回対象とする練習の現場は、著者らによる一連の気功研究のために設定したものである（平成21年3月5日、7時間にわたって実施）。著者らの目標は、気功をコミュニケーションと捉えたときに、当事者がそれをどのように感じ、考えているかを質的研究によって明らかにすることである。そのために初心者を対象に対気練習を行い、これを映像で記録し、直後に半構造化インタビュー調査を行った。

対気練習の参加者の簡単なプロフィールと組み合わせのルールについて、第1表でまとめた。第1表中のA～Cは、気功歴に記載した通り、初心者対象の気功講座、あるいは大学院授業を受講しているが、対気は学んでいない。

(2) 映像の撮影方法

対気の組み合わせ毎に、両者の全体像を横から捉えるビデオ・カメラ(A)と、顔や手の表情を観察するために初心者の上半身を捉えるビデオ・カメラ(B)とを設置した(第1図)。

一般に、映像を撮影する際に映される側が緊張したり、撮影する側の期待に応えようとする意識を持つ等が撮影の注意点として言及されている。しかし、今回の被撮影者達には設置されたカメラを意識する動作や表情は観察されず、全員が対気の練習に集中していると観察できた^{註6)}。

第1表 調査対象者（「対気」参加者）のプロフィールと組み合わせのルール

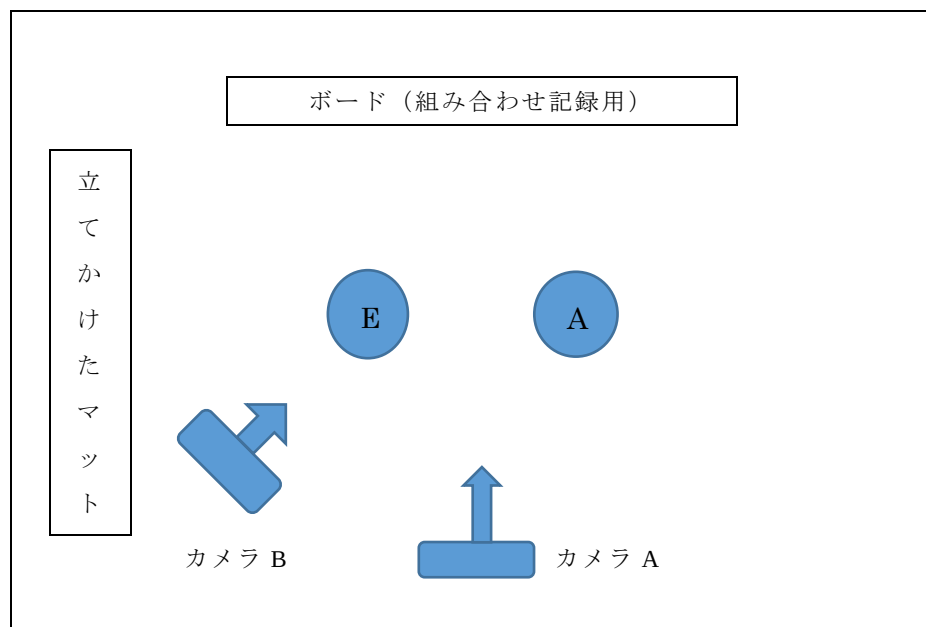
参加者	年齢	性別	気功歴、気功指導歴(平成21年3月5日当時)
A	20代前半	女性	初心者対象の公開講座（10回:講師はF）受講。
B	20代後半	女性	大学院の授業（1年間:講師はF）受講。
C	30代前半	女性	大学院の授業（同上）および初心者対象の公開講座（同上）受講。
D	40代後半	女性	気功歴9年。
E	40代後半	男性	気功歴18年。気功指導歴あり。
F	60代前半	男性	気功歴20年。気功指導歴あり。

組み合わせのルール

* 初心者はまず、指導経験のある熟練者 E か F と行い、対気のやり方について学ぶ。
 その後に、D を含む熟練者と練習する。

* 初心者同士は、対気を行わなかった。

* 熟練者同士は、対気を行った。



第1図 練習の撮影現場

2. 分析方法

(1) 分析対象とするケースの選択

この現場の分析を進める中、初心者が現場で対気を習得していく中での変化が顕著であることが明らかになった(武者小路、2009)。初心者(A～C)はいずれも(著者らが当事者として見たときに)“対気を習得している”

と見て取れる変化が起こっている。こうした対気の映像を一点取り上げ、映像分析を行なうことにした。

この一点を選択した理由を以下に述べる。参加者各々の組み合わせの映像を様々な観点から検討したところ、(1)その変化が段階

を経てはっきりと生じている、(2)初心者の動きや表情が素直で分かり易く、生き生きとして魅力的である、(3)言葉は少ないながらも当の初心者が何かを習得していると読み取れる発言をしている、(4)相手となった熟練者の指導の仕方も巧みで生き生きとしている。即ち、当事者の立場から対気習得の良い例と捉えたものを有意抽出した。それは、AとEの組が行った対気の映像である。

(2) 映像から読み取る非言語・身体コミュニケーションの諸要素

人が非言語コミュニケーションをするときの身体や身体環境の要素は様々に区分され体系化されている^{註7)}。本研究ではこうした研究の中でも対人コミュニケーションのチャンネルを言語要素と合わせて示している大坊郁夫(1998)の分類を参考とし、対気中

の初心者の非言語コミュニケーションを分析するのに適切な形に修正した(第2表)。

加えて、初心者Aと相手の熟練者Eとは、対気を習得する中で相互に身体的に関わり、相互作用を行っている。これを「身体としてかかわりあう人間は、他者の身体動作の連続体のある特なかたちで類別し、その類別に応じておのれのふるまいかたを変えている」(菅原、1996)、そのあり方を身体コミュニケーションと捉える菅原と野村(1996)の研究を参考に、身体コミュニケーションとして分析することにした。特に、相互に動作を連続させていく相互作用を越えて、両者の「同期」「同調」「リズムの一体化」と捉えられる相互浸透的な身体空間のあり方を映像から可能な限り抽出し、読み解いていく。

第2表 分析に用いた要素

Aに焦点を当てて観察される要素(言語・非言語コミュニケーション)		
音声的	言語的	(発言の内容・意味)
	近言語的	(パラ言語)
		a.音響学的・音声学的属性(声の高さ、速度、アクセント等)
		b.発言の「間」・沈黙/発言連鎖から捉えられる間や沈黙の行為
非音声的	身体動作	c.体の動き(手腕や足腰の動き・体全体の動き)
		d.姿勢(体の傾き・立ったときの足幅や頭の位置・「胸を広げる」「背中をすばめる」等)
		e.表情(視線と目・瞳孔の動き、口や眉の動き等)
		f.身体接触
		g.その他の観察可能な身体の変化(「▲に力を入れる」「汗をかく」「紅潮する」等)
	プロクセミックス	(空間の行動)
		h.相手(E)との距離行動
		i.相手(E)以外の人的・物理的關係との距離行動
両者(AとE)の相互身体作用における要素(相手との関わりにおける身体コミュニケーション)		
音声的・非音声的	言語・非言語的	エンタテインメント(同期)、シンクロニー(同調)等

(3) 分析の単位

初心者 A と熟練者 E との対気がどのようなであったのか、繰り返し映像を再生しつつ上の非言語・身体コミュニケーションの諸要素を一つ一つ複数人で読み取り・解釈するという分析を行った。

A と E の対気は 10 分 32 秒に渡る。それを次のように区分けしていくことにした。一般に対気は右足を踏み出して始め、＜押す＞＜押される＞を繰り返し、一方が＜飛ばされる＞かそれに相応する反応をした時点で、今度は反対の左足から踏み出して同じことを行う。この右足からの＜押す＞＜押される＞：＜飛ばされる＞と続く左足からの＜押す＞＜押される＞：＜飛ばされる＞が終わって 1 セット、1 回の終了とみなす。ところが、A と E との組は、(通常と異なり) 初回に A が左足を踏み出し E がそれに応じたため、左足を踏み出した練習から始まっている。また、A はこの直前の練習で F に相手と両手を組む対し方で指導を受けたため、片手の甲を相手のそれと合わせるのではなく、E と向き合った時も両手を出し、E もそれに応じて両者は両手を組んでいる。そして、A が＜飛ばす＞側、E が＜飛ばされる＞側に立ち、A の＜押す＞動作を受けた E は、＜押し返す＞か＜飛ばされる＞かの反応を見せた(この立ち位置も、多くの気功教室や流派では指導者が＜飛ばす＞側に立つが、それらとは異なっている)。

そこで、この分析では、A と E の一連の練習で、左足から踏み込んで E が＜飛ばされる＞、次に右足から踏み込んで E が＜飛ばされる＞ことが起こった時点で 1 セット、1 回の対気の終わりと数えた。この数え方で、A と E は計 13 回の対気練習を行っており、最終回の 13 回目は E の指示の下、左足を踏み出した回で終了している(右足で踏み出して

の練習は行っていない)。

この 13 回全てを非言語・身体コミュニケーションの諸要素毎に分析した内容は膨大である。このため、本研究では、まず 13 回に渡る練習の全体像を要約して提示した上で、第 1 回目と第 13 回目の左足で踏み出して行う対気練習において諸要素を読み取り・解釈して比較し、そこから初心者 A の変化を探る。この二つの回を選んだのは、初心者の変化という点では他に魅力的な練習が展開されている回があるが、単純に一番最初の回と一番最後の回だからである。全体像の要約は、膨大な映像データの分析の詳細を圧縮する作業となるため、映像から何が起こったかを読み取る著者らと分析補助者らの意味解釈が大きく入り込んだものとなった。他方、第 1 回と第 13 回の比較は、非言語・身体コミュニケーションの要素毎に映像から読み取ったことに可能な限りの客観性をもたせるように努めた。

(4) 分析の手続き

上記の分析において、この現場に参加しておらず従って現場についての所与の知識がなく、データとしての映像だけを捉える視点、また、気功経験を持たず“対気ならこういうことが起こっているはずだ”という背景知識が一切ないままに映像から読み取る視点が重要と考えた。そのため、分析において、現場に参加しておらず気功経験のない分析補助者(1~4 名)に加わってもらった。

分析作業は映像全体、1 セットまたは 1 回の単位毎、そして分析に用いた要素(第 2 表)毎に行った。これには膨大な時間を要したが、必ず分析補助者が最低 1 名は加わるようにした。映像を再生し、各人が分析シートに読み取れたこととそれがどういった行為や様子なのかを解釈して記入し、その後互いのシートをつき合わせた。見落としや疑問が生

じたときなど、必要に応じて繰り返し映像を再生して観察した。

分析者は各々映像を読み取り、様々な深度の解釈をせざるを得ない。例えば、両者が幾度<押す><押される>の動作を繰り返したかは、計測して客観的に報告することができる。しかし、表情を読み取る際、初心者の表情がリラックスしているのか固いのか、あるいは組んだ二人の手の合わせ方を読み取る際、ぎこちない組み方なのかスムーズに組めたのか、等については分析者毎に見て取っての主観的な解釈が含まれる。分析補助者には、読み取りの幅を意識しつつ様々な深度の解釈を行うよう依頼し、分析者もこれに従った。例えば何秒の沈黙があったか、踵から脚の伸ばし方は床から何度であったか等、計測できることはできる限り計測し客観性を持たせること、尚且つ映像から読み取れる表情が‘自信に満ちた感じ’^{註8)}等、心情を主観的に読み取らなければできない解釈であっても記述を行い、客観性のあることと解釈の多く入ったこととの両方を区別してどちらも分析した。

各々が最終的に分析シートに記述した中から分析者と分析補助者の全員が一致した内容だけを、映像から読み取れる・解釈できる結果として扱った。

3. 結果の提示における課題

(1) 被撮影者の人権・プライバシー等

現場やその当事者たちの活動を撮影し映像分析を行う際には、当然のことながら、当事者・関係者への十分な倫理的配慮を行うことが必須である(秋田、2013; 山崎ら、1997)。参加者全員には、気功練習をするに当たって、映像とインタビュー録音の許可をとり、これらを研究目的に限って公表する承諾許可を得た。更に、参加者 A と E には映像の利用

を決めた時点で映像の公表について再度確認し書面での許可を得た。映像の公表についての許可が得られたものの、論文発表における映像データの扱いは慎重に協議した。研究成果を提示する上でデータの共有は不可欠であり、簡単に読者にアクセス可能とするためにはインターネット利用は便利である。しかし、誰でもがネット上でのダウンロードや加工ができる形にすることによる悪用を懸念し、ネット上に掲載することは取り止めた。代わりに、電子化された論文においては静止画を提示し、映像の閲覧を希望する方には所属・氏名を明記の上、著者らに申し込んで頂く形をとることにした。

(2) 映像データの収集と加工の過程における恣意性

ビジュアルなデータとして(動画ではなく)静止画を用いることに関して、Michael Ball と Gregory Smith (1992) は、その収集と加工の過程を次のように批判する。写真は、“ありのままの現実”としての客観性を強力に主張するように見て取れる一方で、

- ① その場ですぐに撮影できるという即時性があり、その場にいた人の“記憶を映し出したもの”となってしまう。
- ② しかし、写真は編集によって仕立て上げたり、装ったりできるものである。見せたいように加工することも、嘘をつくこともできるし、写真を目にする人が、それがどのような状況で撮られたかについて知らされないことも多い。
- ③ 写真は、見せたいこと、“事実”を提示するために用いられる。撮影者は、特定の社会的関心に基づいて、写真がもたらす印象や現実、ドキュメンタリーを提示し、見た人に共感してもらおうとしている。感覚を通して見て取れるものは、その人の文化的な前提、個人

的知識、写真撮影の文脈に依存している。

- ④ さらに、写真が提示される文脈や、キャプションが存在する。写真はそのまま提示されるのではなく、眺める人に対してその解釈を補助するものと一緒に提示されている。

このように、写真の撮影と加工の過程には、それを意味のあるものとするための多層的な解釈作業が存在する。こうした点で、研究者は注意深くあらねばならないと Ball と Smith は述べている。

本研究においても、撮影や編集加工の段階で、その過程をどれだけ誠実に、即ち現場を“ありのままに”示そうとして行っても、その加工・編集過程の中で選択した映像は、著者らが“ありのままの現場”と捉えたものとなっており、そこには有意性、恣意性がある。特に、現場の映像を扱うのが気功を日常から行っている現場の当事者(インサイダー)であるということの影響は見過ごすことができないと考える。

著者らは、映像分析におけるデータ収集や加工の段階の恣意性は排除できず、また、排除するよりも、どういった基準に基づいてこれを行ったかをできるだけ明確に記述し、読者に報告し共有化していくことが望ましいと考える。それ故、データ収集や加工の段階でどのような選択をしたかができるだけ透明になるように、その詳細を伝えつつ、リフレクシヴな側面を射程に入れながら質的分析を行っていくことにした。

(3) 現場やそのデータから読み取り解釈する際の背景知識の多様性

本研究では、分析が一通り終了した段階で、養生学とは異なる分野の研究会(情報技術分野の応用系)で研究発表を行った^{註9)}。その際、質疑応答時に映像データに関して著者ら

とは違う読み取り・解釈に基づいた見解を頂いた。ここから、映像をどのような専門分野から眺めるか、気功練習の現場についての体験や気功を練習した体験を持っているか持っていないか、映像を繰り返し緻密に眺めるか何かを前提としてざっと眺めるか等、様々な読み取り方や解釈の仕方があり、映像をデータとして共有した場合も読み取りや解釈は人によって一通りではないことを目の当たりにした。

目に映ることを知るために引き出されてくる「背景知識」^{註4)}には、言葉を介して個人や社会が体系的に利用している知識(バーガーとルックマン、1977)だけでなく、暗黙知(ポラニー、1980)や身体知(金子、2007)も含まれるであろう。またそこには視覚刺激と結びつけられ引き出される意識内の何かがあるかもしれないし、そもそも刺激の受け取り方自体、社会的・文化的に形成された「環境世界」(ユクスキュル、1995)によって異なっている。更に本研究が気功の練習現場を扱う以上、読み取り解釈を行う人がどのような「身体性イメージ」^{註10)}をもっているかによって、引き出されてくることが変わると推測できる。こうした背景知識は、わたしたち一人一人が現場からも、現場で収集されたデータからも、何らかの読み取りや解釈をする時に働いている。本研究で分析対象とする気功練習現場の映像では、現場を経験しているか／いないか、気功経験があるか／ないか、どのような気功体験を持っているか、等によって読み取り・解釈に開きがあると推測できる。

第V章では、著者らとは異なる読み取り・解釈を頂戴したエピソードを取り上げ、映像データからの読み取り・解釈の多様性を受け入れつつ、そこから著者らが再構成したことも提示する。映像から読み取れること、解釈

できることとは、ただ一つの“ありのままの現場”“現場で生じている現実”として構成されるものではなく、各々が受け取った背景知識に基づいて“現場”“現実”として構築したことである^{註1)}。従って、著者らが第三者の補助を受けつつ分析した内容(初心者の変化)も、別の背景知識からの捉え方も、同様にそのような“現実”であり、本研究に重要な示唆をもたらすものである(それは、分析や省察を重ねた結果として捉えたこととそうでないこととを同類に扱うということではない)。データを介して読み取り・解釈できる“現実”は再解釈され得るものであり、その意味で解釈はオープンである。本研究では、捉え方の相違を受け入れて再解釈を継続することで、より正確な、あるいはより深い解釈や多元的な解釈、当事者に配慮した解釈が可能となると考えている。

(4) “現場で生じていること”の多様な読み取り・解釈の提示

上記の考え方に基づき、映像に対しての多様な読み取り・解釈を否定せず、それらをオープンにしたまま提示するために、エスノグラフィーという方法^{註11)}を取り入れた。具体的には、第V章において同一の映像に対して異なる解釈が得られたエピソードと、そこから著者らがどのように再解釈を進めたかを記述して報告する。これを行うのは、リフレキシブな視点から解釈を省察する過程を報告する意味があると判断したためである。

第V章で行うエスノグラフィーの記述は、それ自体もまた、著者らの視点から捉えた“現実”としてリフレキシブな視点で位置付ける必要がある^{註12)}。そこで提示したエスノグラフィーの記述もまた、著者らの(再)

解釈であるという意味合いを込めて、第V章自体を、「物語」ということばで扱った。「物語」として現場やその映像データの解釈が、オープンかつ継続的に解釈・再解釈されるものであることを示したい^{註13)}。

IV. コミュニケーションの変化: 映像分析を通して

本章では映像データの分析結果を報告する。最初に、全体像としての対気練習の推移を示し、次に第1回目と13回目の対気について非言語・身体コミュニケーションの諸要素を比較した結果を示す。最後に、これらから推察できる初心者の変化についてまとめた。

1. [A-E 組]の対気練習 13 回の推移

第3表に、映像から読み取れるAとEとの13回にわたる対気練習の流れを示した。著者ら及び分析補助者達が映像から読み取り解釈した中から、互いに一致した部分をまとめたものである。

非言語・身体コミュニケーションの諸要素の分析を簡単に総括しているため、映像内容を一種のストーリー化したものとならざるを得ないが、第1回目は、

組となり挨拶をして、互いが向き合う(両者はこの回が初対面)。Aは対気を行うのがこの日初めてであり、この組み合わせの前にF(熟練者)と組み対気を行った。Aは、その対気(互いに相手を押し合い、最後に相手を飛ばすものだった)の後の緊張を引きずっている様子。Aはからだも表情も硬いまま始め、硬いまま終える。(第3表第1回目概要)

第3表 A (初心者) と E (熟練者) の組における対気練習の流れ

分析を提示する際の記号について (第3表以降もこれに準ずる)	
「そうそう」	当事者の発言。
<押す>	対気という身体技法の中核となる動作の単位。
‘自信に満ちた感じ’	当事者の状態を主観的な表現で解釈したもの。(4名以上の分析者・分析補助者が一致した場合にのみ記入)
(途中で止まる)	注釈、あるいは行動について推測できること。
[E が膝を曲げる→ A も膝を曲げる]	連続的動作として観察されるもの。

第1回目 組となり挨拶をして、互いが向き合う(両者はこの回が初対面)。A は対気を行うのがこの日初めてであり、この組み合わせの前に F(熟練者)と組み対気を行った。A は、その対気(互いに相手を押し合い、最後に相手を飛ばすものだった)の後の緊張を引きずっている様子。A はからだも表情も硬いまま始め、硬いまま終える。

左 *	(カメラ撮影のため A の左側に離れて立っている) F の助言に従い、直前に教わったやり方(両手を合わせて相手を押す)で E と組む。E と手を合わせる折に何度か手の位置を替えて組み直しているが、その様子から手を組む行為にぎこちない印象がある。全身に力を込めて E を飛ばす。E は「おお〜っ」と声をあげて激しくマットにぶつかる。終わった後、A はかすかに頭をかしげている(‘これでいいのだろうかといった表情’)。
右	手を組むのに再び組み替え直しを行っている。戸惑っている様子。<押す>までの間、前回よりも長いこと集中している(4.5 秒 左足の組のときは 1.5 秒)。押し方も力任せではなく、ややゆっくりになっている。 <押す>中で A が集中している間、E も集中している様子。A が<飛ばす>際、E は前回よりもゆっくりと飛ばされ、マットにぶつかった時点でにやりとしている。A は<飛ばした>後、今度は大きく左に首をかしげる。E 「今、焦ったでしょ」。A 「ちょっと待てなかったです」。

第2回目 A に迷い・困惑が入ってくる。「タイム」(A)。	
左	両者が手を合わせて回す時から A は迷った様子で、困惑したように自ら首を行っている。そこから相手を<押す>ことに入れず、途中で放棄したような感じ(‘自分で何かが違うことが分かっている感じ’)。ようやく押し終わったが、頭を激しく振りながら「キヤー」と頭を抱え、体をほぐす運動を始める。
右	苦笑いをしながら再度<押す>。が、少し押して(‘駄目だと感じたのか’)途中であきらめたような表情になる。押し終わってから、軽く飛びながら両手で顔を覆い、次に E の方を向いて両腕をクロスさせて「タイム」。

第3回目 これまでのやり方で、うまく押せず、押すタイミングもつかめない —— ‘今までのやり方では駄目’。

左	E が膝を出しながら両手で<押して>いくのを大きく押し返したが、「そこまで行ったらもう無理」(E)と言われる。やり直しをするが、押そうとしても E を押せない。傍らに立つ F に向かって「わからなくなってきた」とつぶやき、「もっと前から」(F)と注意を受ける。E は「もう、あそこまで行っちゃっているから」と言いながら、体をずらし手を動かしながら ‘A の体を越えた向こうまで何かが「行っている」’ことを示している様子。この時点では、A は ‘自分がなぜうまくできないかも分かっていない’表情をしている。再度 E が<押し>A が<押し返し>たとき、E は「お～、そうそうそう」と言いながらストーンと後ろに下がる。
右	E が少しだけ押したところで二人は静止し、長い間じっとしていると E が「あははは」と笑いながら後ろに下がる。A は何が起こったのか腑に落ちない様子(‘相手が下がったけれど、なぜ今度下がったのかわからない’という様子)。

第4回目 失敗から何かがうまく行っていないことに気が始める。

左	A は何度も足を踏み込んでから体勢を決める。A と E とは組んだまま、(今度は E も踏み込んで<押す>ことをせず)両者は静止している。そのまま A が<押す>と、E は「お～そうそうそう」と素早く大きく後ろに下がる。
右	同様に A が<押す>が、E は殆ど下がらず、A は首をかしげて途中で中止する。

第5回目 うまく行かず、自信もなく、試行錯誤。

左	A は何度も足を踏み固め、ため息をつき、目線を下にして始める。A と E とが組んで静止したままの状態になり、そこから A は大きくため息をついて俯いたま<押そう>とするが、<押せない>。その後、「そこで」「その気持ちだけで」と E と言われる。
右	また、大きなため息をつく。同様に静止したままの状態から E が少しずつ踏み込んでいくが、途中で A は首を横に振りながら<押す>のを放棄(‘失敗したと感じた様子’)。同時に E が「あ～」と言う。

第6回目 二人の様相が変化し始める。

左	同様に静止したまましていると、間をおかず E が「あはははは」と笑いながら後ろに下がる。E が大きく笑って下がったことにより、A もそれに合わせ笑うが、軽く首をかしげており ‘ちょっと納得していない様子’。
右	前回(6回目左)のときと同様のことが起こる。E が「お～ あははは。それぞれ」と言いながら左手の指で OK サインを作る。A は微かに笑いながら相手をじっと見ている。‘なぜこれで良いのだろうと感じている様子’。目で E を見るが、顔全体は下向きで自信がない表情である。

第7回目 大きな変化。初めて両者が手を合わせないで行う。場の雰囲気が変わる。	
左	初めて両者が手を合わせないで向き合う。第6回目までと立ち位置は同じだが、Aは相手と手を組んでいた場所で、両手の指を伸ばして構えている。Eは手の指を軽く丸めている。両者は手を20cm離れたまま<押す>しぐさを始める(途中、10cmまで近づく)。そのまま静止して少しするとEが「あはははは」と笑いながら後ろに下がる。マットのところまで行って、左踵、次に右踵で軽くマットを蹴る。Aはその間、満面の笑み。Eは戻ってきて「そこそこ、その感じ」とAの両手(お腹[“丹田”?]の前にある)の辺りの空間を指差す。「先にさあ、要するに、そのう、体はアト(後)なんだよね」(E)、「体はアト?」(A)、「アト、結局」(E)。(この回から主にEがAに語りかける形で会話をしながら両者は対気を行うことになる。Aの非言語コミュニケーションに着目すると、これ以前Aは相手を<押す>という動作を行う最中も足の位置を交代して相手と組み直す間も‘間断なく緊張している’。が、これ以降、会話をしつつ相手と足の位置を交換する間(=対戦中でないとき)はリラックスした動作・表情で笑い、相手と組んで<押す><押し返す>あるいは<静止する>時(=対戦中)には真剣な表情に変わるといった“メリハリ”が明確になってくる。また、<押す><押し返す>の動作以外の時は、顔全体をEに向けてEを見て笑っている。これ以前の俯いて相手を見ないという‘気まずい感じ’は消えている。)
右	会話した後、AとEは先ほどよりも互いの手が更に離れた所から向き合う。Aの表情は明るい。Eは話しかけつつAと向き合い、少しすると「お～ そうそう」と言いながらゆっくり後ろに下がる。

第8回目 Aの理解に二つのレベルがある —— <押し方>がわかった様子だが、その<押し方>でなぜEが反応するのかを尋ねている —— 「何で、何でわかるんですか?」(A)	
左	前回と同様に手を触れずに組むと、Eが「わははは」と笑いながらゆっくりと下がる。「何で、何でわかるんですか?」とAが言う(Eの笑いながら下がるタイミングとAが何かを感じた・気付いたタイミングとが一致していることがこの発言から分かる)。AはEの反応から自分がどう押せばよいかはわかってきたが、何故その<押し方>でEに伝わっているのかが分からない(分からないことの内容が以前とは変化した)。Eは話しかけられて、笑いながらOKサインを出す。
右	同様に組んで、少し静止。そのまま一度、Eが笑う(が後ろに下がりはいしない)。さらにもう一度、Eは笑い、今度は後ろに下がる。

第9回目 Aは、やり方は掴めたが、‘仕組みがわからない様子’。練習の場は初回の頃とは全く違い、‘場全体がなごんでいる感じ’で進む。	
左	EがAに「いいよ。フェイントかけてみて」と声をかけ、Aが笑いながら「フェ、フェイント? フェイントが分からない」。「ようするに、例えば動作だけでさあ、出してるフリしてさあ、実は出して、出さない」(E)。「あ～」(A)。「本当によし! って思ったとき

	しか出さない」(E)。Aは笑い、楽しそうな表情で同意する。両者は組み、手を放したまま静止し、Eがすぐに笑いながら下がる。「今、ちょっと思ったでしょ。今ちょっと思ったでしょ、ね？フェイントしようと思ったけれど、素直に、思っちゃったでしょ」(E)。「フェイントする余裕がない」(A)。「余裕がなかったでしょ」(E)。
右	「ってことはやっぱり、その、何かが先行しているんだよ」とEが述べると、Aは頷く。「何かが、こう、それを、あ、そうそうそうそう（何かに反応していったん少し下がっていく。そこから戻ってきて）うまくあやつることが一番大事」(E)。さらに、Eが「そいつをもっと、そっちを倍増させていく、これ（Aの手）じゃなくて、」とAの手を軽くつかみながら言葉をかけ、「そうすると—— いや、こちら（手）も使っているよ」(E)と両者は再び手を組み合わせる。EがAをく押し>、同様に静止、すぐにEは「お～」と叫び、「はっはっはっ」と笑いながら激しく下がってマットにぶつかる。Aは自信をもって行っている様子。見学者(F)の方を見てEを指差しながら「おかしいですね(笑)。わっけ、わかんない(笑)」と笑う。この時のEを見る表情は、以前のように分からない気まずさの表情ではなく、親しみを込めている。両者の関係の変化がみられる。(また、「おかしいですね(笑)。わっけ、わかんない(笑)」というのは、Aが何かを感じているタイミングとEが笑って後ろに下がるタイミングとが一致していることに言及していると推察できる。)

第10回目 理解できたやり方で、現実には失敗をしながらもそのやり方を実践し、練習していく。

左	Eは「それ、それ、それが、分かるね？今のわかった？だってさあ、先行したじゃない？明らかに、手より先に」と話しかけて、Aの手を軽くつかむ。両者は再び手を組み合わせて始める。「結局、後からついてくるんですよ」(E)「ふ～ん」(A)と両者は話しながら、Eがゆっくりとく押し>、Aがく押し返し>、Eは激しく後ろに飛ぶ。「お～そうそう」(E)。
右	「そいつをきたえる。それをきたえる」(E)。Aはこの反応に対して、自信のある嬉しそうな表情を返す。再びEはゆっくりとく押し>、Aはく押し返す>がうまく飛ばせない。もう一度挑戦してく押し返す>動作をするが、既にその途中でAは首を横に振っている。‘自分でも駄目だったことが分かっている’様子。3度目にく押し返し>、今度はEが「お～そうそうそう」と言いながら激しく後ろに下がる。「オーケーオーケー大丈夫」(E)。

第11回目 理解できたやり方で、自信をもって行っている。

左	Eが「それぞれ。それを集中させて。さらに」と言いながらく押し>、Aがく押し返し>、Eは「お～そうそうそう」と笑いながらゆっくりと下がる。「最後の、『手』なくても大丈夫」(E)。
右	Eの説明を受けAが手を離すと「そのままでいい(手)」(E)と、両者は再び手を合わ

	せる。「多分、一緒ね」と E が述べ A は頷く（＝手は組んでも組まなくても、手の力を入れることで行うのではない、という理解）。「で、無理にそんなにあれしなくてもいいから。体は体で任しといていいから」と E が説明し A が頷く。A は＜押し返し＞、E はマットまで下がる。A は以前よりさらに「自信を持った表情」。
--	--

第 1 2 回目 「空恐ろしいなあ」(E) —— A が“何かをつかんだ”表情となる。	
左	組んで長いこと静止した後、E は静かに A を＜押し＞ゆき、A が＜押し返し＞と、E は「わっははは」と笑いながら激しくマットまで飛び、崩れ込むように座り込む。「空恐ろしいなあ」(E)。A はそれを聞いて大きく首をかしげるが、‘にこにここと笑い自信を持っている様子’。「今、だからあ、分かる？ わざとさ、こっちじゃなく（手を振る）してたの」(E)。
右	静かに互いに向き合い、E が徐々に A を＜押し＞いく（‘押すというより近づいていく感じ’。）「あ～ そうそう」と E が声をかける。A はじっと感じている様子だが、押されながら「あ～ 残念でした～」と E に言われると同時に頷いている。そして、「行けないのは分かります、はい」と E を＜押し返し＞代わりに手を放して自ら止める。「うん。行けないよね。あそこまで入られると」(E)。A はにこにこ笑って E の目を見て頷く。（前半で、「ここまで入る」と E に言われたときは‘何のことか分からない’という表情だったが、この時点では何を言われたか理解している表情と頷きの動作）。

第 1 3 回目 習得。OK をもらって終了となる。	
左 (右はなし)	互いに軽く手を合わせ静止（A は集中しているが、前半のように‘根を詰めた感じ’ではなく‘軽やかさ’がある）。E は首をゆっくりと回転させながら内的な感覚に集中している様子だったが、すぐにそのまま「おお～っ」と笑いつつゆっくりと後ろに下がる。そして、「それ、それ」とにこやかに A に述べる。A も同時ににこにここと笑い、頷き、体を揺すり体全体で嬉しそうな気持ちを表現している（‘先生に言われなくても、自分でもうまくいったのが分かっている感じ’）。「はい、ありがとうございました」(E)。「ありがとうございました」(A)。

* 対気では 1 回ごとに両者とも片足を踏み出して行い、次にもう片側の足を踏み出して行う。つまり、1 回ごとに左足での組み方、右足での組み方で 2 度行っている。この 2 度を「左」「右」で以下で表す。

と見て取れる練習であった。ここで A は、熟練者 F と初めての対気を行った後に E と組み、F の時とは違う何かを感じて戸惑う様子を見せた。その戸惑いの中、2 回目、3 回目と練習を重ねるが、どのようにしたら E と

の対気をうまくやり遂げられるかの試行錯誤を繰り返す（4～5 回目）。ところが、第 6 回目の A のあり方に対して、E が笑いながら＜飛ばされる＞反応をしたところから、A が何かを掴み始めるきっかけが訪れる。

第7回目、両者は手を合わせないで行い、A 自己のからだの内側に集中しているようすが深くなる。E は謎かけともとれるような、身体空間（A の両手の前の空間）を差し示したり（「そこそこ、その感じ」）、「先にさあ、要するに、そのう、体はアト（後）なんだよね」といった肉体を超える何かに言及する。A の表情はそれ以前と比べて、満面の笑顔に変わっている。その後は、掴みかけたやり方の仕組みを確認し（8～9 回目）、掴み取ったことを確かにし自信をもって練習を行う（10～13 回）。そして、最終回の 13 回目だが、

習得。OK をもらって終了となる。（第3表 第13 回目概要）

というところで、A は何かを習得したという自信のある嬉しそうな表情となっている。

2. 初回と最終回との比較

以下で、初回（第1 回目）と最終回（第13 回目）とを、非言語・身体コミュニケーションの要素毎に詳細に比較していきたい。読み取り・解釈の内容を提示する際に用いる記号（括弧等）は、以下では第3 表冒頭に示した使用方法に準じている。

（1）音声的（言語的・近言語的）要素

第4 表に、音声的要素の比較をまとめた。第1 回目と13 回目の言語的要素（発言内容）は表の通りである（両者の会話の詳細を転記し、付録1 に載せた）。

発言を見る限り、第1 回目も13 回目も E は挨拶や指示的なことを話しており、＜飛ばされる＞動作の前後に声を上げているが、A には（第1 回目で E の挨拶に「～ます」という口元の動きで答えているかもしれないが）はっきりとした言語的反応はない。

しかし、近言語的要素に着目すると、第1 回目で A は E の挨拶にお辞儀で応えるだけであるが、第13 回目では E の発言に対し A は同じリズムで表情や動作を返してやり取りをしている。映像には笑顔や体を揺らすこと等（以下の表情や身体コミュニケーションの項を参照）が観察され、両者は第1 回目には見られなかった友好的なコミュニケーションをしていると見て取れる。

A の発言は、13 回の練習全体を概観しても多くはない（付録1 参照）。E の「今、迷ったでしょ」に対しての「ちょっと待てなかったです」（1 回目）、「キャー」「タイム」（2 回目）、E の「先にさあ、要するに、その、

第4 表 音声的（言語的・近言語的）要素の比較

音声的要素		
	第1 回目左足からの単位	第13 回目左足からの単位
言語的要素	E:「よろしくお願いします。」(A に向かって軽く一礼する。A も礼を返し、無言だが口元が「～ます」の形に動いている)	E:(笑いながらゆっくり後ろに下がりがら)「おお～っ。ウワハッハッハッハッ。」
	F:「両手でやるー」(A と E に向かって)	A: (E の笑い声と同時に、笑って頷き、体を揺する)
	E:「両手で? はい。あ、こっち?ー はい」(A の出した両手に合わせて)	E: (手を振って)「それ、それ。 はい、
	F:「ゆっくり押し込んでってください。」	ありがとうございました。」(礼をする)

	E: (A に押されて)「おお〜。」	A: (礼をする) E:(場を離れながら)「あ〜、おもしろい。 あ〜、おもしろかった。」
近言語的要素 a.音響学的・ 音声学的属 性	・両者が両手を組み、組み直す素早い動きの中、F は素早く指示し、E は‘キビキビと作業する感じ’で話している。	・E の声は楽しげなトーンで、E の‘おもしろかった’という発言内容や A の表情等とぴったり一致している。
b.発言の時系 列的パターン	・E が登場し、「よろしくお願いします」と軽い会釈をしたとき、A もすばやく頭を下げてお辞儀をしているが、このとき音声データに録音されていないものの、口元が「〜ます」と発音する形に動いている。 ・A は終始沈黙のまま、動作をしている (F と E の指示に無言で従い、集中している様子。E と F のみが喋っている。)	・両者とも、対気中はじっくりと集中しているが、E の言葉がけと A の顔きは素早く軽快に進んでいる (間はない)。

体はアト (後) なんだよね」に問う「体はアト？」(7 回目)、E が下がったことに関して「何で、何でわかるんですか？」(8 回目)、E による「いいよ。フェイントかけてみて」を問う「フェ、フェイント？ フェイントが分からない」及び E の反応に対して F に向かって「おかしいですよ」「わっけ、わかんない」(9 回目)、A のやり方に対する E の「あ〜 残念でした〜」というコメントに対する「行けないのは分かります、はい」(12 回目) 等である。発言は E の方が圧倒的に多く、会話も E が先導しているが、「おかしいですよ」「わっけ、わかんない」(9 回目)のように、E の振る舞い方に対して主体的に親しみを込めて行った発言や、「何で、何でわかるんですか？」(8 回目)のように対気中の E の身体的反応に対して疑問と感じたことを主体的に発言している例もある。

(2) 体の動き

次に、第 1 回目と 13 回目の A の体の動きを比較したい (第 5 表)。第 1 回目と 13 回目

の映像において異なる動きが観察された。前者では A は E を(1)<押す>準備をし、(2)<押し>、(3)<押し>終えるという、押すことを中心とした 3 分節の動きが見て取れる。一方、後者では A は E と組んだ後、(1)動かずに‘集中している感じ’で静止し続け (17 秒)、そこからある時点で E が<後ろに下がる>動作をし、(2)A はその直後に笑顔となり軽く体を揺すって集中を解くという、2 分節で捉えられる。

第 1 回目では、A は左膝を前に出し、体を反らせて、重心を素早く移動するような動きをしている。また E が押した時に両腕を引いて、それを真っ直ぐ伸ばして素早く投げるような動作をし、<押した>後に踵を高く上げている。この動きを解釈するなら、‘相手を素早く勢いよく押した’と見て取れる (第 2 図)。一方で、第 13 回目では手を組んでから殆ど動きがなく静止している。そして、E が後ろに下がり「おお〜」と言って笑った後、‘ガラリと体の表情を変えて’嬉しそうに体

を左右に揺すっている（第3図）。

この[静止して集中 ⇒ 嬉しそうに体を揺する]という切り替えは顕著に見て取れた。以上から、第1回目と第13回目とでは、体で<押す>動作中心の動きから、何らかの体勢で集中し(結果として)<相手が下がり>、集中を解いてそれがうまく行ったのを表現するという動きに変化したと見て取れる。

もう一つ目立った点として、第1回目ではAは体を揺すって身構え、Eと手を組む時に二度やり直し、Eが<押す>という働きかけをすると、すぐさま押し返している。組めてから<飛ばす>までは3~4秒である。他方、第13回目では一度でスムーズに手を組み、初めからすんなりと相手と手を合わせる体勢に入れたように見て取れる。そして、組んでから17秒の間、静止して集中している。そのため、両回を比較すると、第13回目では特定の「型」を身につけて、内的集中を深

める形をとっているように見える。そしてEが下がるのと同時にそれが切り替わるため、対気がうまくいったかを自ら感じ取れるように変化したと見て取れる。

(3) 姿勢

第6表に姿勢について分析したことの比較をまとめた。

身体の動きと同様、姿勢にも第1回目と13回目で変化が見られた。前者は押す前に足幅が広く、体を傾斜させて押しながら伸び上がり（第2図）、姿勢からは前足、爪先側に重心があるように見て取れる。他方、第13回目では、ほぼ真っ直ぐに立ち、重心も真っ直ぐである（第3図）。首から上も、第1回目では前傾しているが、13回目では真っ直ぐ頭の上に乗っている。

第5表 体の動きの比較

非音声的 — 身体動作 — c.身体の動き	
第1回目左足からの単位	第13回目左足からの単位
<u><押す>前</u> ・Eが組みの相手として前に立つまでは陸上競技の投げる動作の練習をしていたが、Eが前に立つとそれを止めてEと向き合う。次に、体を揺すって身構える動き。そして、相手と両手（手のひら）を合わせる。 ・相手と組む時の手や足の構えと姿勢に戸惑い、‘どのようにやるのか分かっていない’感じ。二度やり直している。動きも硬い。そのまま押す動作に入ってしまう。 <u><押す>動作</u> ・Eが押していった、Aは引いて、その引いた分の力で‘力を込めて押している’。	<u>Eと組んで集中</u> ・相手と組む時に、組み方がずっと決まっている。互いに近づいたら、スムーズに二人の組み方が決まった。(Eの膝の形も‘ピタッと決まってい’、互いにどう行うのか、もう決まっている感じ)。 ・互いに手を組んでから17秒の間がある。1回目のようにEから押していくのではなく、17秒おいてEが後ろへ下がる。 ・Aには、殆ど動きがない。動作をうまく行かせるための体勢がすぐに出来る（うまく組むために体勢を固める動作がない）。そのまま‘集中している感じ’。

・左膝が前に出て、次にウェストを中心に背骨を大きく反らせ、相手を体全体で押す(このとき重心が大きく前足に移り踏み込んだような動きになる)。押しながら、両腕は何かを素早く投げるように前に伸ばす。 <u><押した>後</u> ・腕全体を水平にまっすぐ伸ばし続けている。 ・背伸びをする形で後ろの踵を高く上げている。 【全体の印象】 体全体の反らせ方と戻し方や腕の動きから、‘相手を素早く勢いよく押した’と観察できる。 ・この動作の前と後との切れ目がない(13回目と顕著に異なる)。 ・互いに手を組んでから、3~4秒で動作を始めている。まず E からのアクションがあつて(足を踏み出した)、それを受けて A は力を込めて押した(13回目とは違う)。	・E は途中少し膝を踏み込んで、その後少しして後ろに下がっている。 <u>集中を終える</u> ・E が「おお～」と言って笑うと、A はこれまでの静止から、‘ガラリと体の表情を変えて’嬉しそうに体を左右に揺する。
---	---

A の＜押す＞前



A が＜押す＞



A が＜押し＞終える



第2図 A と E の組み方と動き（第1回目）

A が組んで集中



E が<後ろへ下がり>



A は集中を終える



第3図 A と E の組み方と動き (第13回目)

第 6 表 姿勢の比較

非音声的 — 身体動作 — d.姿勢	
第 1 回目左足からの単位	第 13 回目左足からの単位
<u><押す>前</u> ・前（左）足と後（右）足は足幅で前後 1.7 足分、右左で 1 足分開き、身構えの揺すりをしながら立っている。 <u><押す>動作</u> ・押した瞬間、体が 25 度前傾する（第 2 図）。 ・その後、体全体が伸び上がる。同時に、後（右）足の踵が上がり足の甲が床から 90 度立ち上がる形となっている。 ・前足加重、足全体も爪先側に加重しているように観察できる（足の裏はぴったりついていますが、全体の姿勢からそのように見て取れる）。 <u><押した>後</u> ・踵を上げて伸び上がったまま 2 秒静止する。 ・首から上が体全体よりも前に傾いている。	<u>E と組んで集中</u> ・後足の踵が床についている（第 3 図）。 ・前（左）足と後（右）足は足幅で前後 1 足分、右左 0 足分の開きで、右の足先がやや外側に開いている。 ・両足とも、足の裏全体をぴったりと床につけて足の中心に重心があるように観察できる。 <u>集中を終える</u> ・ほぼ直立のままじっとしていたが、E が後ろに下がり始めると、少し曲げていた左膝を真っ直ぐに伸ばす。ほんの少し、伸びる感じ。 ・体を左右に揺する。 ・頭は真っ直ぐに体に乗っている感じ（1 回目のように首から上が前傾していない）。

（4）表情

第 7 表に表情について分析したことの比較をまとめた。

これも動作や姿勢と同様、第 1 回目は押す前と押す時、押した後、第 13 回目は組む時と E が後ろに下がる時で表情が変わっている（第 4 図と第 5 図）。まず視線であるが、第 1 回目では相手と組む前に一度 E に視線を向けた以外は相手を見ず、‘何かに集中をしている’様子である。そして押すと同時に相手を見る。他方、第 13 回目では組む前後に E を見ており、一方組んでからは半眼で瞬きを繰り返し‘内側に意識を集中している’ようである。また特に E が下がる時点ではゆっくりとした瞬きが生じている。内的な集

中の深さが推察できる。

他には、第 1 回目では口元が軽く開いていたところから、押す時にへの字に結び、押した後は口角が下がって力が入っているところや、首や法令線の皺が深い、第 13 回目では軽く閉じたところから口が開き笑顔になっており、法令線や首の皺も目立たないことから、1 回目の方が顔全体に力が入っていると観察できる。これは全体の表情の印象からとも言え、第 1 回目は‘硬い’が、第 13 回目は組んで練習しているときは集中するがその前後は E に向かって笑顔を見せて‘リラックスしている’と見て取れる。練習とそれ以外との表情のメリハリがはっきりしているのも、第 13 回目の特徴と言える。

第7表 表情の比較

非音声的 — 身体動作 — e.表情	
第1回目左足からの単位	第13回目左足からの単位
<u><押す>前</u> ・表情全体：Eが来るまでは何かに視線の焦点を当てることなく口元はやや開き微かに微笑みながら軽く競技練習をしている。次に、撮影用のビデオカメラに注視するが、Eが歩いてくると顔全体をEに向ける。Eが前に立つ間、一度Eの顔に視線を向ける（1.0秒）。Eが「よろしくお願ひします」と声をかけると、すばやくお辞儀をする（この時は相手を見ていない）。一瞬、‘不安な表情’がよぎる。次にFが声をかけたため、ちらと（0.2秒）自分の左側にいるFの方に目をやる。Eが「両手で？— あ、こっち？—」の声をかけた途端、身構えの動作と共に相手の顔の下方に顔全体を向ける（‘うつむき加減’）。この時は視線の焦点を結んでおらず相手を見ていないように観察できる。‘対象をみることをせず何かに集中している’様子。そのまま0.2秒静止するが、一度ゆっくりと瞬きをする。 ・視線：注視はEの登場の時のみ。それ以前は集中する様子がない。実際に対気が始まってからは「何かを見る」のではなく‘内的な集中をしている’様子。このとき目全体の縦幅がやや狭くなっている（「半眼」とまでは言えないが、その前後と比較すると、前後は「見開いた」状態）。 ・口元：終始軽く開いた状態。 <u><押す>動作</u> ・視線：押し始めに一度Eの顔を注視し（0.1秒）、その直後に目の焦点を合わせずに押している。押すと同時に相手を見る。瞬きは普通に瞬いている。 ・口元：へんの字に結んでいる。口角が下がっている。法令線の刻みが深い。顎や口に‘力を入れている感じ’。 ・押す瞬間、首筋に深い皺がよる。 <u><押した>後</u> ・表情全体：Eが押されてマットにぶつかる間（0.2秒）、押す前に比べて目を見開いてEの顔を見ている。一度、ほんの少し顔を右回転させる形で傾ける（0.1秒）。『これでいいんだろうか』と、自らに（特に相手に対してではなく）問いかけるような‘表情。見る時には口元が下がっていて、‘自身がなさそう’（13回目と異なる）。 【全体の印象】 全体として‘硬い’。相手と組む、<押す>動作をする、終わって次の動作をする、といった流れの中で表情が切り替わっていない。	<u>Eと組んで集中</u> ・表情全体：‘無表情’‘内側に意識を集中している’と観察できる。 ・視線：Eと向き合っているものの、半眼で瞬きを繰り返している（9回）。瞬きの回数が日常的な行為をしているとき（目を潤すための瞬き）よりも頻度が多い。 Eが下がると同時にゆっくりとした瞬きを一回した後、軽い瞬きをする。このときの最初の瞬きは日常的な行為をしている時のものとは全く異なる。この長い瞬きの時、口角が1回目よりも上がっており、‘力んでない’様子。 ・口元：口は軽く閉じている。口角が1回目より上がっている。法令線の刻みも緩い。 ・首筋に皺はない（1回目と異なる）。 <u>集中を終える</u> ・表情全体：にやっと笑う。‘とても嬉しそう’‘視界に意識が戻った’と見て取れる。 ・視線： ・口元：口が開き、前歯が大きく見える。 【全体の印象】 全体として‘リラックスしている’。組んで、動作をする前後で、表情が切り替わっている（1回目はそうではない）。組む前後に笑顔があって、そこから真顔で集中している。対気1回ごとのメリハリがはっきりしている。

A の＜押す＞前



A が＜押す＞



A が＜押し＞終える



第4図 A の表情（第1回目）

A が組んで集中



E が<後ろへ下がり>



A は集中を終える(1) (笑顔)



A は集中を終える(2) (体を揺すっている)



第5図 A の表情 (第13回目)

(5) 身体接触

第1回目と13回目ではAとEの手の組み方は二つの点で大きく異なっている(第8表)。

一つ目が、向き合った時の互いの手の組み方である。第1回目は一度でうまく組めず、やり直しをしている。このため‘ぎこちない’印象を与える。他方、第13回目はお互いに手元をチラリと見ただけですんなりと組めている。そのため、‘自然に組めた感じ’である。

もう一つが、手を組んでからの両者の手の接触の仕方である(第6図)。第1回目では、押す段階になって、Aの手は丸めていた指を伸ばして指全体に力が入った感じでしっかりと隙間なくEの手と合わさっていく。そのため‘手で押している感じ’と読み取れる。他方、第13回目では、AはEの手を親指と

人差し指で乗せているが、それは‘軽く添えているだけのような感じ’と読み取れる。Eが後ろに下がる時も、Aの手には力が入っていない。

1~5回目までの対気の練習では、Aはうまく行っていないと感じていたらしい(第3表)。第6回目でEが笑いながら下がったり「それぞれ」とOKを出したところから、第7~9回目左足の回まで手を合わせないで練習することが起きている(第7図)。

身体接触とは一般に、他者に触れること(touching)であり(大坊、1998)、本研究では触覚を介したコミュニケーションに焦点を当ててきた。触覚は全身にあり、接触コミュニケーションは感情を伝えるのに有効な手段であり、また接近性(immediacy: 二者間において認識されたある一定の身体的・心理

第8表 身体接触の比較

非音声的 — 身体動作 — f.身体接触	
第1回目左足からの単位	第13回目左足からの単位
・Fに指示されて、Eと両手を組めるよう、手の甲を上向きにしてEに両手を差し出す(自分のみぞおちの前の位置)。Eが「両手で? — はい。あ、こっち? —」と声をかけている間(このときEもまた手の甲を上向きにして両手を出したので)自分の両手を返して合わせ方を探るように動かし、今度は手のひらを上向きにしてEと両手を合わせる。 ・AとEとの両手の組み方は、特に上の組み直しによって‘ぎこちない感じ’に見える。また、A、E共に手元を確認しながら組んでいる(13回目は異なる)。(⇨身体コミュニケーションの項の結果と重なる) ・組んだ手は、最初はEの手を包むように自分の掌全体を乗せて軽く触れる程度で、Eの両手を‘持っている感じ’。そのまま押す段階になって、指全体に力が入り、しっかりと(隙間なく)合わさっていく。Aは‘手で押している感じ’。Eは‘押された力で後ろに行く感じ’。手の指は、軽く丸めていた状態から、押すにあたって伸ばされ、押し終えると再び丸く曲がる。	・1回目と同様、AとEが両手を組むが、その間喋っており、お互いに手元をちらと見るが後は殆ど見ないままで‘自然に組めた感じ’(1回目とは異なる)。 ・組み方——Aは手のひらをずっと自分の中心側に向けて出し、すんなり相手の手を乗せている。親指と人差し指で相手の手を乗せているが、触れ方は‘軽く添えているだけのような感じ’。その2本の指以外は伸びている。Eも自分の手を乗せているだけで、何もしていないように見える。そのままEの体全体が少し前に出たら、すぐに後ろに下がり始めたので、その時に何かが起こったように見えるが、Aの手には力が入っていない。

第 1 回目



第 13 回目



第 6 図 A と E の身体接触（手の組み方）



第 7 図 手と手を密着しない対気（第 8 回目左足の回）

的な親密性)と大いに関係がある(リッチモンドとマクロスキー、2006)。また、触れ合い(contact)や密着(bonding)とも関わっている(ヴァーガス、1987)。第 6 回目の

変化から、第 7 回目に何故、A と E は手を合わせずに、即ち肉体密着型の接触はせずに、対気を行ったのであろうか(第 3 表)。第 7~9 回目左足の回までの映像を観察する

と両者が接触をやめたとは見て取れない。互いに手と手、その皮膚と皮膚が密着していなくても、全身、特に体幹の前半分が相手を受け止めるような向き合い方がなされている。ここでは、互いの身体空間が相手を感じするという接触がなされていたのではないだろうか。それは、身体空間同士の接触として感じられ（Eの差した「そこそこ、その感じ」）、皮膚が取り巻いている肉体ではない、“気のからだ”の接触が試みられていたのではないだろうか。その後、「こっち（手）も使っていい」とEに指示され、13回目まで再び手を組み練習が進められる。しかし、組まれた手と手が密着型ではないのは、押すために肉体で行われていた接触とは異なる位相の、身体接触へと変化していったと推察できる。

（6）その他の非言語要素

その他の非言語要素として第1回目と13回目で観察可能だったことを、第9表にまとめた。比較できることは少ないが、第1回目ではAの呼吸の仕方が押す前に息を詰め押す時に短く吐くか止めているように見られるが、第13回目では静かな自然呼吸で押し

ながら息を吐いていることが観察できた。

これが、第1回目の方が押し方の‘準備ができていない（整えていない）’まま押している印象を与える。

もう一つの違いが、相手のEの飛ばされ方である。第1回目では素早く後退してマットに当たっているが、第13回目ではAと一緒に長いこと静止した後、少しだけ膝を前に出して笑いながらゆっくり後退して軽くマットにぶつかっているという違いがある（第2図と3図）。

（7）プロクセミックス

第1回目と13回目について読み取れることの比較を第10表にまとめた。

相手と組む時の距離はどちらでもほぼ同じだが、第1回目では距離を測るように足踏みして体を揺すっているが、第13回目では後足を踏みかえて入るが距離自体を図る行動はしていない。そのため、後者では‘適切な距離が分かっている感じ’と読み取れる。

また、第1回目では、その直前に指導を受けていたF（両者の脇に立っている）に意識を向けているが、第13回目では、相手のEに集中している。

第9表 その他の観察可能な身体の変化の比較

非音声的 — 身体動作 — g.その他の観察可能な身体の変化	
第1回目左足からの単位	第13回目左足からの単位
・もともと色白の頬がやや紅潮している（これ以前の組み合わせの練習で、既に血色が良くなっていたのかもしれない）。 ・呼吸：回数は測れない。押す直前に息を詰めて、押す時に息を止めるか短く吐くかして（どちらなのかは判別がつかない）、押している。‘準備ができていない’‘整っていない’まま押している印象。 ・Eの飛ばされ方：勢いよく押されて、ある程度動き出してから「おお～」と言っている。下がるスピードが速い。背中が丸くなって背中からマットに当たっている。‘背中でぶつかっている感じ’。	・呼吸：4回。静かな自然呼吸。押す時は、ほんの微かに長く息を吐いて（4回目）、Eが飛ぶ。 ・Eの飛ばされ方：1回目と比べて、押される前に非常に微細に膝を前に出しゆっくり笑いながら下がっている。マットへのぶつかり方も柔らかい。

第 10 表 プロクセミックスの比較

非音声的 — プロクセミックス		
	第 1 回目左足からの単位	第 13 回目左足からの単位
h.相手 (E) との 距離行動	挨拶をしてから、両手を合わせるところまで近づく。相手との距離の取り方を 3 回足踏みして体を揺すりながら測っている。押す時には、横から見ると前に出した左足先が相手の左足先と同じラインに並び、横幅での距離は 20 cm くらいである。その距離で相手を押す準備に入る。	両手を組む時に後足を二度踏み改めているが、E との距離は一定に保ったままである。 ‘適切な距離が分かっている感じ’。直立で、横から見て左足先が相手の左足先と同じラインに並んでいるのは第 1 回目と同じ。そのままの距離で静止している。
i.相手 (E) 以外 の人的・物理的 関係との距離 行動	始める前に、ビデオカメラのところに いる F (A から 140 cm のところ) に目 を向けている (意識している)。	E との練習に集中しているため、他との距離行動はない。

第 11 表 身体コミュニケーションの比較

身体コミュニケーション — 音声的・非音声的 — 言語・非言語的	
第 1 回目左足からの単位	第 13 回目左足からの単位
・[A が ‘構えて体勢を整えるように’ ‘踏み固める動きで’ 足を動かす →E も足を動かす。同時に膝を動かす →A が腰を動かす。同時に方が少し揺れる] という連鎖があるように観察できる。 ・A と E の ‘リズムがあっていない感じ’。 顕著なところで、A の呼吸のリズムと E が飛ばされるタイミングが合っていない (13 回目は合っている)。A が息を詰めるようにして押し始めているが、それが ‘準備ができていない’ 印象を与える。組んでから 3-4 秒で押ししまっている。E とも身体リズムを合わせていない。押す時も、息をしていないようにも見える (少なくとも、13 回目のようにはっきり長く吐きながら押しているわけではない)。 ・‘準備ができていない’ 感じに加えて、E の側も首を回すという行動をしていない (13 回目と異なる)。	・[E が膝を前に曲げる →A も膝を前に曲げる] という連鎖があるように観察できる。 ・A と E との ‘リズムの協調’ があり ‘シンクロしている’ ように観察できる。A の呼吸のリズムと E が飛ばされるタイミングが合っていると見て取れる。組んでから 17 秒間、A は 3 回吸って吐いて、整えてから押している。このとき E は微かに首を回しているが、その速さが A の呼吸の早さと一致している (A が息を吐いて、E が首を後ろに回す動きが 3 回連動しており、呼吸と動作がぴったり一致する)。A が 4 回目に吐くとき (長め)、E は首を回していつて頭がちょうど正面に来たとき後ろに下がっている。 ・[E が後ろに下がるのと同時に、A が笑う] [E がマットにぶつかり OK サインを出すのと同時に、A が笑って体を揺する] と、両者が ‘同時に何かをしている感じ’ が見て取れる。

(8) 身体コミュニケーション

A と E との身体コミュニケーションに関しては、第 1 回目と 13 回目とで、大きな開きがあると読み取れた (第 11 表)。前者では、両者が互いの動きに呼応していくという意味では動きの連鎖があるが、その‘リズムが合っていない’。それは、相手の動きに対する反応としての動きはあるものの、特に、上の「その他の非言語要素」で述べたように、A の呼吸と押し方に‘準備ができていない’印象があり、E との協調も見出せないからである。他方、第 13 回目は、互いが身体リズムを協調させていると見て取れる。特に、A の呼吸のリズムと E の首の回転の動作、A が長く息を吐くタイミングと E が飛ばされるタイミングが合っていると見られる。最後に、E が後ろに下がるとその直後に A が笑い、E の OK サインと共に A が笑いながら体を揺すするため、両者は‘同時に何かをしている感じ’という印象を受ける。この最後の協調は、練習を通して身体的に掴んだことを互いが共有しているとも見て取れる。

2. 初心者のコミュニケーションの変化

最後に、第 1 - 2 節で報告した分析結果を踏まえ、初心者 A の変化についてまとめた。A は、E との練習において、対気を行う際の自らのからだのあり方も、相手との関係性ややり取りの仕方も変化させていったと捉えることができる。第 1 節において、映像からは、A が当初の戸惑いから E の反応や言葉がけに従って試行錯誤を繰り返しながら、E とどのようにすればうまく対気ができるかを掴んでゆく過程が読み取れた (第 3 表)。それは、相手との組み方、集中の仕方や押し方等の身体技法や、それを行うのにどんな感覚を持てばいいか、どのような意識でいればいいのか、について習得していく過程

であり、E の促しに応じて A は動作や身体感覚を微調整しながら対気のやり方を模索している。7~8 回目では、E の説明に対して質問したり (「体はアト?」)、E の動きや感覚に疑問を発したり (「何で、何でわかるんですか?」)、試みたことに関して自己分析したり (「フェイントする余裕がない」)、E の反応を楽しんだり (「おかしいですよね」「わっけ、わかんない」) もしている。そして、13 回にわたる練習を通して、A と E との関係性も、緊張のある関係性から、相手を導く側とそれに従って対気を学習していく側という関係性、また、親しみを持つ友好的な関係性へと変化したと見て取ることができる。

第 1 回と 13 回における非言語・身体コミュニケーションの諸要素の比較も、これと矛盾するものではない。映像では、第 1 回目は<押す>準備をし、<押し>、<押し>終えるという 3 分節で動作、姿勢、表情が観察できるが、第 13 回目では相手と組んで集中してから相手が下がり集中を終えるという、2 分節で動作、姿勢、表情が観察でき、変化が起こっていた。また、前者では緊張が継続しているが、後者では相手が下がるまで A の内的集中が見られ、その後は静止のまま笑顔となってから嬉しそうに体を揺すっている。これは、練習における集中とその後のリラックスという、練習のオン/オフと捉えられる。姿勢や身体接触や表情からは、A は第 1 回目には緊張や硬さがあり、前のめりに力を入れて押したが、第 13 回目ではリラックスしたまま集中し、腕力は使わずに E を後ろに下がることを達成させていると観察できる。そして、身体コミュニケーションに着目するなら、第 13 回目では A と E とは、第 1 回目にはなかった身体リズムの同調を築いていると捉えられる。

これらを総合して、A の変化とはどのよう

なものであろうか。両者は練習の推移（第3表）に従って、ある種の感覚に集中していったと推測できる。その感覚とは、Eが指示している、体や手ではなく（7, 9, 10回）「そこそこ、その感じ」「お～ そうそう」（第7回目）、「何かが先行」「そいつをもっと、そっちを」（第9回目）、「それぞれ、それが」「そいつをきたえる」（第9回目）、「それぞれ。それを」（第10回目）といったものである。それは、両者が組んだ時に、Eが感じ取っており、Aもまた対気を行うために感じ取り始めている身体感覚なのではないだろうか。そして、それを感じ取り、Eが「きたえる」「倍増させる」「あやつる」（第9, 10回）という言葉で促しているような何かを行うことが、対気の学習と結びついているのではないだろうか。

映像では、Aのコミュニケーションの変化は、特に表情（緊張から集中と親しさへと変化）と身体コミュニケーション（相手との身体リズムの同調が生まれる）で顕著だったと言える。その表情や身体コミュニケーションを分析するためには、映像に映ったことを読み取って解釈するという主観的・相互主観的な判断を入れる必要があり、分析者と分析補助者とが主観を通して読み取る必要の程度は高くなった。

それを踏まえた上で、第Ⅱ章予備的考察の第1節「推測される初心者の変化」で述べたような、当事者として仮定した「筋力による<押す><押される>:<飛ばす><飛ばされる>から、“気感”による<押す><押される>:<飛ばす><飛ばされる>に変わった」という、当事者の感じ得ることよりも具体的な変化が、この映像分析で明らかになったと言える。ここでの初心者Aは相手を身体動作として<押す>ことから、特定の身体感覚を感じ始めそこに集中することで相

手と対するように変わっている。その集中の対象とは、Eが促しておりAが学習している何かであり、両者が共に感じ取れているらしい何かである。表情や身体コミュニケーションの変化から読み解くならば、緊張を解いてリラックスしたまま集中を深め、相手との親密性を高め、互いに身体リズムを同調させていくということがそれと関わっている。即ち、相手へと身心が開かれていき相互に同調する状態が生まれることが、その身体感覚を得ていく引き金となっているように見える。それは、相手とからだを通して相互浸透的に同調してこそ感じられる何かではないだろうか。更に言えば、「二人の志向が自分の身体の領界を越えて互いに相手へと越境し、それが交差している」（鯨岡、1997）状態でこそ感じ取れる何か、共現前するからだのあり方、相手との身体共有空間に開かれたあり方へと、Aのからだや意識は変化していったと推察できる。そして、その時、感じ取れた何かが、ここでの対気を成立させているのではないだろうか。

こうした推察から考えると、Aは、緊張して相手と組むこともぎこちなかった第1回の練習から、情緒的コミュニケーションの位相で相手との友好関係を築き、同時にEの促しによって相手との「教える－学ぶ関係」^{註14)}を築くことができた。そして、その関係の元に身体感覚を深めることで相手と身体的に共有している空間を感じ取ることを習得したと推測できる。それと相まって、Eの促す何かに内的に集中することに基づく技法、即ち対気へと導かれていった。それは、ただ手を密着させ力で押すという動作ではなかった。Aの動きが、第1回目のように<押す>とその前後の3分節から、第13回目の2分節へと変わったように観察できるのは、集中している中での何らかの感じ取

りから生じる形に彼らの練習が変わったからである。そこから、E の＜後ろへ下がる＞と同時に A の笑顔やそれに続く体を揺する動作が生ずるのは、集中が解けたリラックスの状態であり、また、集中している中で生じたことの結果を捉えての自然な表現であろう。これこそが、この場合の対気のやり方を学ぶことだったのではないだろうか。

V. 映像が物語ること

本章ではエスノグラフィーの形をとり、まず、著者らが映像データに関する異なった読み取り・解釈を頂いたエピソードを紹介する。その上で、これをどのように検討したか、また、検討したことを踏まえて初心者の非言語・身体コミュニケーションについての知見をどのように再構成したかについて報告する。

1. また別の物語：指導者の誘導

第IV章で述べた映像分析を行っていた2011年、著者らの一人がコミュニケーションの応用研究の研究会^{註9)}に発表者として招待された。そこで、本研究で取り上げた映像を題材として、そこで観察されるコミュニケーションがどのようなものであるか、また、非言語・身体コミュニケーションを中心とした切り口からどう類別できるかに関して参加者に問いかける形での報告を行うことにした。研究会は情報技術分野の研究者が中心であると事前に伺っていたが、他に社会学の研究者も発表者として招待されていた。

視聴する参加者がどのように映像データを捉えるかを予測できないまま、10分32秒のデータをそのまま提示した。会場の様子を眺めた限りでは、このデータの再生時間は発表の場としては長く、対気練習の繰り返しをどう捉えればよいか戸惑っている参加者や、

長々と続く練習光景の映像に飽きているらしい参加者も見かけた。

質疑応答の時間となり、発表者は二人目の質問者（以後、質問者Xと呼ぶ）の質問に衝撃を受けた。

「映像データを見る限り、単に気功指導者側（Eのこと）が誘導しているだけではないのか」という質問であった。対気のやり方について指示をするのも、何が起きているかを発言しているのも熟練者側（E）であり、Aに反応しているのも熟練者である。初心者（A）はそれに従っているだけのように見える。対気を習得しているという事実も、熟練者がそう述べているからそれを受け入れているだけで、全体を誘導しているのは熟練者である、というのが質問者の見解だった。その否定的な口調から、彼は対気練習の現場の“現実”は、熟練者の一方的な構築である、と主張しているという印象を受けた。

発表者は、少ないながら初心者（A）が自ら発した発言や彼女の動作や表情等を読み取れば、必ずしも「誘導されているだけ」とは捉えられないのではないかと回答して発表を終えた。だが、映像データを初心者が練習を通じて対気を学習していく過程と捉えていた著者らは、同じデータに対する別解釈を受けてそれまでの分析結果と方法論について再検討する必要に迫られた。

2. 読み取ることの妥当性はどこにあるか

上記のエピソードから、映像データのどういった点が異なる解釈を生みだしているかを検討することになった。その時まで、現場に参加せず、気功経験を持たない分析補助者も映像データを分析していたが、こうした解釈はしていなかった。分析補助者は、分析作業においていつの間にか、著者らの読み取りに同調してしまったのだろうか。万が一、

そうした要素が完全に打ち消せないとしても、分析補助者は映像を繰り返し眺め、必要に応じて動画を静止したまま詳細を観察し、一定の基準に基づいて分析シートへの記入を重ねた。一方、会場では映像を一度流しただけである。一度きり流した映像からは、全体の視覚的情報と会話とから印象を受け取ることが大きいのではないかと通して流した映像データの視覚的印象に、熟練者の誘導にすぎないと読み取らせる何かがあるのだろうか。

それまでの著者らの分析では、初心者(A)の非言語・身体コミュニケーションに焦点を当てており、熟練者(E)には焦点を当ててこなかった。しかし、改めて熟練者側の発言や非言語・身体コミュニケーションを見直すことにより、次のことが確認できた。再び第3表及び付録1を参考に確認したい。

- ① 13回に渡る練習を通して、Aの発言よりEの発言の方が圧倒的に多い。
- ② Aの<押す>あるいは<組んで静止している>という動作に対して、Eがどのような反応をするかによって、Aがうまくできているか、そうでないかが決定付けられている。特に、Aが暗中模索していた前半において、第6回目でEが示した反応がきっかけとなって、Aが押し方の感覚を感じ取り始めていった。最後(第13回目)にAが対気を習得できたという判断(「それ、それ」)を下すのもEである。
- ③ どうすれば相手を押せるのかAには掴めなかった時も(第1~5回目)、押し方は掴めたものの何故その押し方でEが下がるのかが分からない時も(第6~9回目)、EはAが掴んでいないことを先取りして、自らの反応やAへの説明によって(第7

回目の「そこそこ、その感じ」「先にさあ、要するに、そのう、体はアト(後)なんだよね」等)、どのように感覚するか、それはどういうことなのかを伝えている。これは、からだを通して何を感じその感覚をどのように用いれば対気となるのかを伝え、対気という場、相手との身体共有空間の身体感覚を生じせしめる促しである。

- ④ やり方に関してEが指示することにAは間髪を入れずに従っている。(ただし、Eの反応に疑問を抱いたり(第6、9回目)、説明に対して一定の距離を置くことはあり(第7回目「体はアト?」)、Eの発言全てに盲目的に従っているわけではない。)
- ⑤ Eの発言や動作、表情は終始生き生きと楽しそうであり、特にAがうまく押して下がる時、「あははは」と笑いながら後ろに下がる動作は映像で目立って見える。この力づくで押されていないのに後ろに下がる動きは、対気を知らない人にとっては不自然に映る可能性がある。そこに笑いや楽しそうな表情があれば尚のこと理解困難かもしれない。また、「お~そうそう」とAのやり方がそれで良いことを示しながら、後ろに下がる場合など、Aに押されて下がる動きなのか自ら下がっているのか判別しづらく、大袈裟に見える場合もある(これは、気功経験のある著者らも同感であった)。

これらの5点を検討すると、「指導者側が誘導しているだけ」という質問者の見解も完全に否定することは難しいと考えられた。何故なら、②の点は、初心者Aが行っていることが「対気」として成り立っているかについては、熟練者側がどのような反

応をするかによって決定されるという事実を伝えている。また特に⑤の点は、気功について猜疑心を抱いておらずとも、「これって本当のことなの？」という印象を与える可能性がある。

これを受けて、第Ⅳ章で報告した結果の妥当性を、再検討することにした。ここで述べる妥当性の検討とは、質的研究において、「研究される現象と研究者のそれに関するバージョンとの関係を確かめる」(フリック、2011)ということである。いかなる“現実”であれ、それは社会的に構成されている^{註1)}ことを前提とした上で、それは被調査者の構成した“現実”に対して、研究者の側が構成した“現実”がどこまで実証的に根拠を持っているかを問う、ということになる。本研究の場合、前者は(a)映像分析の被調査者(練習現場の参加者)の構成した現実、及び(b)本章前節のエスノグラフィーにおける被調査者(映像データの聴衆、またとりわけ質問者X)の構成した現実、である。

初心者Aは、熟練者Eに一方的に誘導されているだけだったのであろうか。

3. 新しい物語

(1) 初心者Aからの働きかけ

初心者Aは、熟練者Eに対してどのようなコミュニケーションを取ってきただろうか。まず、一方的に従っていたかどうかに関して、前節(3)で述べたように、対気のやり方(手を組むやり方、どの時点で<押す>か、等)に関してはEの指示や促しに間髪を入れず従っている。が、Eの反応や説明に対しては、分からないことや理解できないことに距離を置いたり、問いかけたりをしている。この点から、一方的に従っているわけではないと考える。更に重要なことは、第Ⅳ章2節を振り返るが、Eの指示や促しに応じて手を

組むやり方や押し方を微調整させ、第1回目と第13回目で動作や身体接触の仕方などを変化させていった。それに伴い、例えば(6)その他の非言語要素や(7)プロクセミックス、(8)身体コミュニケーションの項で取り上げた呼吸や相手との距離の取り方、身体リズムの同調など、Eに指示されていない要素に関しても、自らの体のあり方を変化させている。Eの促しが契機であっても、A自身の身体的変化こそが、練習の推移の中で遂げられたことである。

また、(1)音声的要素や(4)表情の分析では、第1回目の力の入り具合がとれ第13回目では集中した後に笑顔で‘リラックスしている’表情となり、相手に安心して親密なコミュニケーションが築かれていることが明らかである。そして最も注目したいのは、ここで半眼で頻繁な瞬き(9回)をした後、押すと同時にゆっくりとした瞬きがなされ、同時に微かに長く息を吐く呼吸を行っている(第7, 9表を参照)ことである。これを‘内側に意識を集中している’様子と観察した。これはAが何かに主体的に取り組んでいることである。ここで読み取れることは、Aが自ら感じ取ってきた内的感覚を探索し、新たに位置付けて相手と共有する場で発現させようとしているということではないだろうか。それは、主体的な学びであると言える。ここから著者らは、Aは技法を習得する上でEの指示に従ってはいるが、Aの側からも豊かな働きかけを行っていたと考える。

(2) 指導者Eの働きかけが投げかけているもの

一方、熟練者Eはどのようなコミュニケーションをしていたのだろうか。前節で挙げたAの対気がうまく行っているかどうかを決めるのはEの反応であるという点(②)

と、Eの後ろに下がる動き（筋力で押されて下がるのではない、時に大袈裟に見える、等）

（⑤）は、実は当事者としての著者らには見慣れたものである。まず、②のEの反応によって対気がうまく行っているかが決定付けられている、という点であるが、特定の身体技法の習得に関して、練習のどこで、何を感じ、どのようにふるまうのか、その枠組みが実践を通して伝えられることは多い。明確に伝えるために、初心者の体のあり方や動き、感じ方に対してそれが習得途上にあるのか／そうでないのか、できているのか／駄目であるのか、何かを掴んだのか／継続が必要なのか、等を相手となった指導者が実際に反応によって示してみせることはよく見かけることである（現場でのEの「そうそうそう」の連発は、実際の反応と共に、正にこれを行っている」と解釈できる）。それは、対気の型（組み方や押し方、身体感覚等）を教えるということであり、初心者に未知なことを教える、対気というコミュニケーションの舞台へと導く、ということにおいては、質問者Xの「誘導」という言葉もはずれたものではない。

次に、Eの後ろに下がる動きであるが、対気において“気のからだ”となった時、相手からの働きかけや、それ以外の何かを受けとめて、何らかの感覚を持ったりからだが動いてしまう（実際に肉体も動いてしまう）ことは多くある。何らかの働きかけで、何故か分からずに、あるいは心地よく、時に何故か笑ってしまいながら、自然にからだ動くことは起こっている。また、身体感覚で相手が働きかけていることを受け止めながら（この時は自ら意識して）後ろに下がることも多くある。それは気功の体験を扱った資料では主観的な体験として述べられていることであり（遠藤、2002；津村、1993）、ここでも当事者の主観的・間主観的体験として記録する以上

に根拠のあることではない。今回の調査では、他の参加者の組でも（初心者も含め）同様のことが観察できたが、著者らにとってはそれは集団幻想ではなく、“気のからだ”となった時に感じている感覚であり、激しく下がる場合も含め“気のからだの反応”であると述べる他ない。

他方、映像におけるEの下がり方が大袈裟に見える、という点に関しては、“気のからだ”の反応だけでない要素も観察できるかもしれない。Aに対気を教える過程において、どのような押し方が良いのか、どんな身体感覚を使って何をすればよいのかを伝えるために反応していた面もあるのかもしれない。共通の規則（コード）をもたない初心者に教える場合、うまくできたときにやや大袈裟な反応をするということは指導者によってはよく見かける。「教える－学ぶ」の関係でのこうした反応に関しては、言語の習得時の成人の反応が参考になる。乳幼児が言語を習得していくためには、周囲の成人との情緒的関わりに加え、自らの身体の働き（手足を動かす、笑う、人差し指を突き出す、等）の成長が不可欠である（正高、2001）。このうちの人差し指を突き出す行為を、成人は指さし行動と捉える。そして、幼児の指さしに対して周囲の成人は積極的に応答する（「Yちゃんそれは〇〇よ」）ことにより、指示と指示対象との関係、指示対象とことばとの関係が形成されていく。また、人差し指を出す動きに周囲の成人が喜ぶことにより、幼児は頻繁に指さし行動を行うようになる。幼児の身体的成長に伴う、周りの人の強化（reinforcement）が言語習得に不可欠なのである（やまだ、2010）。言語習得には「教える－学ぶ」関係の相互作用的な要素がなくてはならない（パターソンとリンデン、1984；ギル、1998）。ここでは、言語ではなく

対気の習得であるが、熟練者 E は、初心者 A にとって分かりやすい、しかも彼女がリラックスできる反応をしていると捉えることもできる^{註15)}。E にとっての現場は、A と対気を行う場であると同時に、A に対気を教える場でもあったのである。

こうした解釈は、著者たちにとっては当事者としての背景知識を持ち出さなければできないことである。妥当性という点で、第IV章のように一定の基準のある分析作業から導けるのではなく、根拠という点では主観・間主観の域を超えるものではない。「研究される現象と研究者のそれに関するバージョンとの関係を確認する」(フリック、2011)ということから、それでも、第IV章で分析した映像データが指導者側の一方的な誘導だけで構築された場面を映し出しているとは考えられない。

ところで、本研究にとって最も肝要な現象—— A にとっての現場 —— は実際にどのようなものであったのだろうか。

(3) 習得する只中からの声

第IV章で提示した初心者 A のコミュニケーションについての分析は、A の非言語・身体コミュニケーションを読み取り・解釈することである。これを付録2の練習直後の A へのインタビューと比べてみたい。A は E との練習について、「最初のはっきり言って全くわからない」と述べている(17、19行目。以下、行の数字のみで表す)。だが、「一番最後は違う」と述べる(19)。それは、「呼吸している時、何かこっちに落ちてきたというか(22-23)」「ふうって抜いた時に、落ちるべきところに落ちるみたいな(31、33)」ことであり、その場所は、おなかのあたりらしいが(36-37)、そこに「はまった(48、50)」感覚であったらしい。そして「それをどんどん戻していくと、そういう感じで E 先生に

言われている(48、50、54、56、58)」というのは、一端獲得した身体感覚からそれ以前のことを振り返ると、その感覚について E に言われていたのだと分かった、ということであろう。

ここから、A は少なくとも、何らかの身体感覚を得ており、それを意識化していると推察できる。また、その身体感覚はそれまでの E の指示で継続して促されてきたことだと、気付いていると推察することができる。

しかし、E との対気練習について語る A の語り方が言葉を探しながら途切れがちなのは、A にとって体験を言語化するのがいかに難しいかを表していると考えられる(ただし、自分で述べているように[6行目]、人見知りのせいか、他に参加した初心者 B や C と比べても言葉数が少ない)。それは、A に起こったことが、言語領域で起こっていることではなく、からだや身体感覚に起こっていることだからではないだろうか。前述したように、内的集中を深める中で身体感覚を探っていたなら、それを練習直後に言語化することは難しい。言ってみれば、第II章3節で考察した背景知識として、A は熟練者と同じものをもってはいない。感じ取ったことを言語化する段階ではないということもそうであるが(熟練者にとっても気功の身体感覚を言語化するのは難しい)、A にとっては対気練習で探っている感覚は未知の感覚だからである。

A は S の質問に対し、感じたものが、「それが気なのかどうかはわからない」(29)と何であるかは断定しない。そして、

51 S:「落ちるところに、落ちた」おなかのー 丹田？

52 A:あ、ここらへんに落ちた。《自分のおなかの前に片手をかざす》

53 S:丹田に? 《自分のおなかの少し前の空間に両手を当てる》

54 A:ああ、そうですね。あの、そこに近いところらしいにー

「丹田」という熟練者同士の用いる用語に流されることはせずに、自分のからだのどこに感じたかに正確であろうとしている。更に、

55 S:気持ちいい感じ? それとも何かー

56 A:そうですね、でも何かー

57 S:何かしっくりした感じ?

58 A:いや、う〜ん、「気持ちいい感じ」ー

59 S:(**)が近いんじゃないよねー

60 A:そうですね、何かー

61 S:逆にふっとなったんだよね。

62 A:そうですね。ええっと、どうなのでしょうー

63 (2.0 秒)

64 S:落ちるべきところに落ちるのがー

65 A:何か、はまったっていうー

66 S:うん。はまって。うん。それは、いいこと悪いこと?

67 A:そんなのは別がない。はまったっていう感じ。

と、感じたことがどのような性質の感覚であったかも、曖昧でなくはっきりと捉えている(質問者 S が提示した幾つかの用語「気持ちいい」「しっくりした」「ふっと」「いいこと悪いこと」に対して、当てはまらないものを打ち消したり、その用語で当てはめられるかについて逡巡している)。それは、A が身体感覚としては明確な何かを感覚したからである。

初心者 A は、対気に関する一定の身体的な体験を得て、それをからだで捉えつつある段階だと言って良いだろう。

VI. おわりに

ここでは、初心者の対気練習の一例を分析したにすぎず、それが一般的な対気であるのか、また他の初心者が対気を習得するときに同じことが起こるのかまでは分らない。

たとえ一例であっても、身体技法を習得する現場で生じていることは、データ化しても捉えきれない豊穡さを持つ。それでもその僅かな一部、一側面を映像として切り取って入念に観察・分析するなら、当事者がその場で言語化する以上のことが観察・分析可能となる。本研究では、対気練習の場での初心者の変化について、当事者として知る以上の新しい知見を得ることができた。著者らは、例えば初心者が対気を習得する過程で遂げる変化を、気功の当事者として、筋力による動きから“気感”による動きへの変化と捉えていたが(第Ⅱ章)、映像の非言語・身体コミュニケーションを客観的・相互主観的に分析しようと努めることにより、この変化の初心者のコミュニケーションの各要素の変化の詳細と具体的に見比べることが可能となった。また、これまで当事者としての現場の共通認識から“初心者が対気を習得する”ために促していたことが何であったのかについて見直すことができた。更に、ここでの初心者が熟練者とのコミュニケーションを通して、特定の身体空間・身体共有空間を感じ取り、そこへと働きかける身体感覚を自らに生じさせていく過程を推察したことから、これまで“気功”として捉えていたことを質的研究として探っていくための新たな視座を得た。

このことは、養生学で身体技法についての研究を積み重ねていく上で一定の意味をもたらすものと考え。映像データの詳細な分析は、身体技法に熟達した専門家が顕在的に知っている以上の知見を得る一助となり得、潜在的・無意識的に知ってはいるが明確に共

有することのなかった知見に光を当てる契機となり得る。加えて、専門外の他者にこれを伝えていく上でのリフレキシヴな視点は、（言語化することができない、あるいは妥当でない）身体・身体空間・主観的なからだの領域の探究に方法論的視座を開き、これらに関する洞察を重ねることを促していくであろう。

だが一方で、当事者でありつつこれを研究することの方法論的困難さを痛感した。映像を収集・分析する上での膨大な編集加工作業に加え、分析にも長時間を要し、さらに倫理上の問題を解決する必要がある。調査者の恣意性や、映像を読み取り・解釈する際の背景知識の多様性に対して、常にリフレキシヴな視点が必要となってくる。本研究では、気功の身体技法（対気）の現場を対象としたため、そこでの身体感覚、および身体相互作用、身体共有の感覚的世界をいかに切り取り詳細に吟味して報告していくかを探りながら、幾つもの壁を前にした感がある。特に、一端分析を終えた時点で映像データの異なる読み取り・解釈を頂戴し、それを受けとめて結果をどう捉え直すか検討し、これを再構成するまでに六年もかかってしまった。しかし、分析結果にリフレキシヴな視点から光を当てて省察することにより、再構成した結果も、方法論についての知見も、実り豊かに得られたと考える。

本研究で報告する再構成した“物語”は、第Ⅲ章３節で述べた通り、最終物語ではない。非言語・身体コミュニケーションの諸要素の分析から得られる知見として一区切りというだけであり、現場や現場で生じていることは、個々の当事者にとっての感覚やその広がりを探るなら、遥かに多様で豊かに違いない。そうした当事者たちの身体観や世界観を続いて探っていきたい。

【註】

- 1) わたしたちの捉えている“現実”がいかに構成されているかに関して、本研究では P.L.バーガーと T.ルックマンおよびこれらを基盤とした社会学や社会心理学的分析で表明されている社会構成主義的な考えに基づいている。（バーガー, P.L., ルックマン, T. (1977) 日常生活の構成: アイデンティティと社会の弁証法. 東京、新曜社: 358p. および Potter, Jonathan (1996) Representing Reality: Discourse, Rhetoric and Social Construction. London, Sage: 253p. ; Edwards, Derek (1997) Discourse and Cognition. London, Sage: 356p. 等を参照。）
- 2) 本研究では、対気という身体技法の中核となる動作を明示したい場合、その動作を括弧<>で括って表記している（例<押す>）。
- 3) 自身を振り返るリフレキシヴな視点（リフレキシヴィティ）は、現代の質的研究においてその質の向上のための課題であり、不可欠な要素となっている（例えば、能智正博 (2013) ナラティブ・テキストの分析. 質的心理学ハンドブック. 東京、新曜社: pp.324-344. や八ツ塚一郎 (2013) アクションリサーチの哲学と方法. 質的心理学ハンドブック. 東京、新曜社: pp.348-362. を参照）。研究者のインサイダー／アウトサイダーの極を揺れ動く立ち位置や現場との距離の取り方に関しては、実際にやりくりや試行錯誤を繰り返し、研究過程で自らの姿勢・立場に対してリフレキシヴな視点を取り、その省察を研究成果の報告の場でも共有することが有効である（Ashmore, Malcolm (1989) Reflexive Thesis:

Wrighting Sociology of Scientific Knowledge. Chicago, The University of Chicago Press: 287p.). そこでは、研究対象（現象）を捉える背景知識についてもまた、省察する必要があるだろう（Mushakoji, Sumiko (1999) The Process of Knowledge Construction: a Triple Parallel Wrighting of Science, Sociology of Scientific Knowledge and a Candidate PhD Thesis. A Doctoral Thesis. Loughborough, Loughborough University: 315p.). 更に、リフレクシヴな視点を取るのは、調査者の立場に関してだけなのではない。問題としているインサイダー／アウトサイダーの区分けの仕方自体、即ち誰が当事者で誰が外部にいるのか、現場で生じている“現実”について“知っているのは誰であるのか”という現場の“知識の所在”の帰属させ方もまた、省察していく必要がある。

- 4) 現象を視覚的に捉える際に、その印象や目に映ることがどういった内容や性質のものであるかを読み取ったり、そこで何が生じているか、それはどうしてなのかなどの解釈をするために、わたしたちが引き出している知を、総じて「背景知識」と呼ぶことにする。背景知識については、第Ⅲ章3節で検討する。
- 5) 体に対する見方として、本研究では、「肉体」を解剖学、生理学的な対象として捉えたもの、「身体」を社会的、歴史的、文化的に形成されてきた客観的な見方で捉えたもの、「からだ」を現存在的で実存的に感じられている主観的な見方で捉えたものとして、区別して使い分けている（遠藤卓郎（2014）身体技法と大学体育：内側からの体育に向けて。ボディワークと身心統合。東京、創文企画：pp.77-

126.) 中立的に用いたい場合は、「体」とした。

- 6) 初心者（A～C）はいずれも体育学の優秀な学生・院生であり、気功を習得することに集中力を持って取り組んだことも影響していると考ええる。こうしたことから、撮影を意識する程度は低かったと判断した。
- 7) 例えば、ヴァーガス，マジョリー，F.(1987) 非言語コミュニケーション．東京、新潮社：255p. やリッチモンド，V. P.，マクロスキー，J. C. (2006) 非言語行動の心理学：対人関係とコミュニケーション理解のために．京都、北大路書房：315p. では、人の非言語コミュニケーションが重なりながらも異なる区分で体系化されている。
- 8) 本研究では、映像データ中の当事者の状態について主観的にしか読み取れない場合でも、4名以上の分析者・分析補助者がその読み取り・解釈を一致させた場合、その状態を括弧‘ ’で括って表記している（例 ‘自信に満ちた感じ’）。
- 9) 第6回コミュニケーションの分析と応用研究会。（筑波大学，2011）
- 10) 濱野清志は、気功の体験的理解から身体と環境とについての考察を展開している。その中で、藤岡喜愛が表現した「身体性イメージ」という内部感覚的イメージを取り上げ、この身体性イメージとして「自己の身体をとらえ、そこに主観的な身体を＜私＞固有のものとして生み出すことで、私たちは‘気’の大きな流れの中に自分という定点を得ることになる」と述べている。（濱野清志（2008）覚醒する心体：こころの自然／からだの自然．東京、新曜社：204p.）
- 11) 「エスノグラフィー」には複数の語義が

あるが、本研究では「調査者が長期に渡り人々の日常生活に（公然と、あるいは隠れて）参加し、そこで起こっていることを観察し、言われていることを聞き取ったり質問をし、研究にとって肝要な事柄の解明に導きそうなデータを収集すること」と捉えた。（Hammersley, Martyn & Atkinson, Paul (1995) *Ethnography: Principles in Practice*. New York, Routledge : 323p.）

- 12) 社会学や人類学では、エスノグラフィーにおいて現場がいかに記述されているかについて批判や読み解きが繰り返されている。（例：Clifford, James (1988) *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*. Cambridge, Harvard University Press : 381p. あるいはヴァン＝マーネン, ジョン (1999) *フィールドワークの物語：エスノグラフィーの文章作法*. 東京、現代書館 : 284p.）
- 13) 現場を捉えた映像や現場に生きる当事者たちの語ったことが、ある特定の“現実”を状況依存的に構築するものであるのと同様に、それを観察・分析している研究者たちの報告や語りもまた、状況依存的であることが 1970～1980 年代の社会学で「リフレクシブな転回（Reflexive Turn）」として自覚された。この展開を踏まえて、実証主義的な現実の提示の仕方ではない研究報告の形式の模索が「New Literary Form」の流れとして模索された（Mulkay, Micael (1979) *The Word and the World: Explorations in the Form of Sociological Analysis*. London, George Allen and Unwin: 389p. ヴィジュアルな提示に関しては Chaplin, Elizabeth (1994) *Sociology and Visual Representation*.

London, Routledge : 320p.）。本研究では、読み易さの点からこうした「New Literary Form」の形式をとらずに「物語」という説題だけに留めた。

- 14) 「言語を話すということが、一つの活動ないし生活様式の一部であること」を論ずるために Ludwig Wittgenstein が引き合いに出した言語ゲームを検討した柄谷行人は、コミュニケーションの問題とは、共通の規則（コード）をもたない「他者」と「教える — 学ぶ」という関係に立つことであると考察した。他者とは、言語ゲームを共有しない者であり、「教える」とは「意味したこと」がそうした者にとっても成立するかどうかの「命がけの飛躍」に他ならない。（Wittgenstein, Ludwig (1976) *哲学探究*. 東京、大修館書店 : 479p. および柄谷行人 (1992) *探究 I*. 東京、講談社 : 265p.） Wittgenstein や柄谷の考えは言語を対象としているが、本研究では、気功を学び身体化させていく際の「教える — 学ぶ」を対象としている。少なくともここと言える言語との違いとして、自らと他者は身体を介してもっと相互浸透的な何かに位置し、互いに相手との身体共有空間の中で何らかの感覚やイメージを共有していくという可能性を持つのではないか、ということに注意を払っておきたい。
- 15) 第Ⅱ章 2－1 節で説明したように、著者らは E の指導の仕方が巧みで生き生きしていると見て取った上で、A-E 組の対気練習を分析対象として選択した。

【引用文献】

- 遠藤卓郎 (2002) 体と気の世界探訪. 知の銀河系 十.、茨城県、図書館情報大学 : pp39-68.

津村喬 (1993) 気脈のエコロジー: 天人合一と深層体育. 大阪、創元社: 314p.

武者小路澄子, 加藤敏弘, 遠藤卓郎 (2009) “コミュニケーション”としての氣功 ～映像資料の質的分析を中心に～. 日本養生学会第 10 回大会: 28-29.

武者小路澄子 (2009) 対氣におけるコミュニケーションの可能性と潜在性 ―氣功練習の現場への質的調査を通して～. 養生学研究 6 巻 1 号: 1-38.

武者小路澄子, 加藤敏弘, 遠藤卓郎 (2010) 氣功が開くコミュニケーションの地平～体験者たちへのグループ・インタビュー分析に基づく類型化の試み. 日本養生学会第 11 回大会: 31.

武者小路澄子, 加藤敏弘, 遠藤卓郎 (2011) 氣功が開くコミュニケーションの多様性とその類型化: 体験者たちへのグループ・インタビュー調査を通して. 日本養生学会第 12 回大会: 19.

武者小路澄子, 加藤敏弘, 遠藤卓郎 (2011) 氣功修練におけるコミュニケーションの可能性 ―質的調査に基づく‘身体’と‘意識’の共有感覚の実態から―. 人体科学学会第 21 回大会: 40-41.

西野皓三 (1993) 「氣」の贈りもの: 西野流呼吸法. 東京、求龍堂. (ウェルネスブック 5)

Heath, Christian, Jon Hindmarsh, Paul Luff (2010) Video in Qualitative Research: Analysing Social Interaction in Everyday Life. London, Sage: pp.2-3.

秋田喜代美 (2013) 保育・教育の場におけるアクションリサーチと実践的知識. 質的心理学ハンドブック. 東京、新曜社: pp.417-431.

山崎敬一、山崎晶子、鈴木栄幸、三樹弘之、葛岡英明 (1997) ビデオデータの分析法

ービデオとコンピュータを利用した新しいデータの分析法―. 語る身体・見る身体. 東京、ハーベスト社: pp.285-312.

Ball, Michael S., Smith, Gregory W. H. (1992) Analyzing Visual Data. London, Sage Publications: 77p.

大坊郁夫 (1998) しぐさのコミュニケーション: 人は親しみをどう伝えあうか. 東京、サイエンス社: pp.16-18.

菅原和孝 (1996) 序論 コミュニケーションとしての身体. コミュニケーションとしての身体. 東京、大修館書店: pp. 8-38.

菅原和孝と野村雅一 (1996) コミュニケーションとしての身体. 東京、大修館書店: 454p.

バーガー, P.L.とルックマン, T. (1977) 日常生活の構成: アイデンティティと社会の弁証法. 東京、新曜社: 358p.

ポラニー, マイケル (1980) 暗黙知の次元: 言語から非言語へ. 東京、紀伊國屋書店: 146p.

金子明友 (2007) 身体知の構造: 構造分析論講義. 東京、明和出版: 442p.

ユクスキュル, ヤーコブ・フォンとクリサート, ゲオルク (1995) 生物から見た世界. 東京、新思索社: 307p.

大坊郁夫 (1998) しぐさのコミュニケーション: 人は親しみをどう伝えあうか. 東京、サイエンス社: pp.47.

リッチモンド, V.P.とマクロスキー, J.C. (2006) 非言語行動の心理学: 対人関係とコミュニケーション理解のために. 京都、北大路書房: pp. 145-190.

ヴァーガス, マジョリー, F. (1987) 触れ合いの諸相. 非言語コミュニケーション. 東京、新潮社: pp.118-134.

鯨岡峻 (1997) 原初的コミュニケーションの諸相. 京都、ミネルヴァ書房: pp.1-38.

フリック, ウヴェ (2011) 質的研究の評価
基準. 質的研究入門<人間の科学>のた
めの方法論. 東京、春秋社: pp.465-486.

正高信男 (2001) 子どもはことばをからだ
で覚える: メロディから意味の世界へ.
東京、中央公論新社: pp.95-122p.

やまだようこ (2010) 「人の世界」と「も
のの世界」のむすびつき 一指さしを中心
に一. ことばの前のことば: うたうコミ
ュニケーション. 東京、新曜社: pp.71-131.
(やまだようこ著作集第1巻)

パターソン, F.とリンデン, E (1984) ココ、
お話ししよう. 東京、どうぶつ社: 326p.

ギル, ジェリー・H. (1998) チンパンジー
が話せたら. 東京、翔泳社: 241p.

2017年2月12日受付

2017年8月18日受理

【付録 1】 対気練習中の発話の転記

転記内の記号について	
——	言い淀み、もしくは二人の話し手の発言がかぶって発言を止めた場合 (短いものは -)
(5.0 秒)	話し手による沈黙 (秒数)
《手を振る》	動作・状況の補足的説明
(*)	聞き取り不可能な箇所
M: そういう [とくにー] N: [そうなんです。]	[] 内は発話がかぶっている
S	
	インタビュアー (当事者としては D)

【1 左】

- 01 E: よろしくお願ひします。《A に向かつて軽く一礼する。A も礼を返し、無言だが口元が「ーます」の形に動いている》
- 02
- 03 F: 両手でやるー 《A と E に向かつて》
- 04 E: 両手で? はい。あ、こっち?ー はい《A の出した両手に合わせて》
- 05 F: ゆっくり押し込んでってください。
- 06 E: 《A に押されて》おお〜。

【1 右】

- 07 E: こっち? ここここれでいい? 《手の組み方に戸惑う》
- 08 A: はい。
- 09 E: 《飛ばされた後》ヒヒヒヒ 今ちょっと焦ったでしょ。〔(笑)〕
- 10 A: 〔(笑)〕 ちょっと待てなかったです。

【2 左】

- 11 A: 《E を押した後で》キャー。《両手で頭を抱えながら》

【2 右】

- 12 A: 《押し終えて》《両腕をクロスさせて》タイム。

【3 左】

- 13 E: 《押した両手を A に押し返されて》そこまで行ったらもう無理。
- 14 A: 《傍らにいる F に向かつて》わからなくなってきた。
- 15 F: もっと前から。
- 16 E: もう、あそこまで行っちゃっているから 《体をずらし手を動かしながら》
- 17 E: 《A に押されて》お〜、そうそうそう 《後ろへ下がりながら》

【3 右】

- 18 E: 《後ろに下がりながら》あははは

【4 左】

19 E:《Aに押されて》お～そうそうそう

【5左】

20 E:そこで。その気持ちだけで。

21 A:ってどの気持ちだけで（笑）？

【5右】

22 E:あ～

【6左】

23 E:《後ろに下がりながら》あはははは

【6右】

24 E:《下がりながら》お～ あははは。それぞれ 《左手の指でOKサインを作りながら》

【7左】

25 E:《弾けるように笑って下がりながら》あはははは。《戻ってきて》そこそこ《Aの前の空間で手を

26 動かす》その感じ。先にさあ、要するに、そのう、体はアト（後）なんだよね。

27 A:体はアト？

28 E:アト、結局。

【7右】

29 E:《ゆっくり後ろに下がりながら》お～ そうそう。

【8左】

30 E:《笑いながらゆっくり下がりながら》わははは

31 A:何で、何でわかるんですか？

32 E:《笑いながらOKサインを出す》

【9左】

33 E:いいよ。フェイントかけても。

34 A:あはは（笑）フェ、フェイント？ フェイントが分からない。（笑）

35 E:ようするに、例えば動作だけでさあ、出してるふりしてさあ、実は出してー 出さない。

36 A:あ～ （笑）

37 E:本当によし！って思ったときしか出さない。

38 A:あははは《笑いながら頷く》

39 E:《笑いながら下がり》今、ちょっと思ったでしょ。

40 A:（笑）

41 E:今ちょっと思ったでしょ、ね？ フェイントしようと思ったけれどー

42 A:（笑）

43 E:素直に、思っちゃったでしょ。

44 A:フェイントする余裕がない。

45 E:余裕がなかったでしょ。

【9右】

46 E:ってことはやっぱり、その、何かが先行しているんだよ。

47 A:《頷く》

48 E:何かが、それを、こうー あ、そうそうそうそう 《何かに反応していったん少し下がっていく。

49 そこから戻ってきて》 うまくあやつことが一番大事。そいつをもっと、そっちを

50 倍増させていく。《A との間の空間で手をぐるぐる回す》 これ《A の手と軽く組みながら》じゃ

51 なくて。そうすると—— いや、こちら《A が手を離しかけたのを E の手が引き止める》も使って

52 いいよ。《両者は再び手を組み合わせる》 お〜 はっはっはっはっはっ《笑いながら激しく下が

53 ってる》

54 A:《F に向かって E を指差しながら》おかしいですよ（笑）。わっけ、わかんない。うふふ（笑）。

【10左】

55 E:それ、それ、それが、分かるね？今のわかった？だってさあ、〔先行さしたじゃない？〕

56 A: 〔《頷く》〕

57 E:〔明らかに、〕 〔手よりー〕 《激しく後ろに飛びながら》お〜 そうそう。

58 A:〔《頷く》〕 〔《頷く》〕

【10右】

59 E: そうそうそうそう。結局、後からついてくるんですよ。で、そいつをきたえる。それをきたえる。

60 E: お〜そうそう。お〜 そうそうそう《激しく後ろに下がりながら》

【11左】

61 E: オーケーオーケー大丈夫 《笑いながら下がる》

62 A: (笑)

63 E:それぞれ。それを集中させて。さらに 《A を押しながら》 《笑いながらゆっくりと下がりなが

64 ら》お〜 そうそうそう。最後の、「手」なくても大丈夫。

【11右】

65 E:そのままいい《組んでいる手のこと》 で多分、一緒ね。 お〜そうそう《下がる》

66 A:《頷く》

【12左】

67 E:で、無理にそんなにあれしなくてもいいから。体は体でまかしといていいから。 お〜そ

68 うそうそうそう《下がりながら》 《笑いながら激しくマットにぶつかり、座り込む》 わっ

69 ははは。そら恐ろしいなあ。

【12右】

70 E: 今、だからあ、わざとさ、分かる？ こっち《手を振る》じゃなくしてったの。あ〜 そうそう。

71 あ残念でした 〔残念でした〜〕

72 A: 〔《頷く》〕 行けないのはわかります、はい。

73 E:うん。行けないよね。あそこまで入られると。

【13左】

74 E:〔《笑いながらゆっくり後ろに下がりながら》おお〜っ。ウハッハッハッハッ。〕

75 A:〔《笑って頷き、体を揺する》〕

76 E:《手を振って》それ、それ。 はい、ありがとうございました。《礼をする》

77 A:《礼をする》

78 E:《場を離れながら》あ〜、おもしろい。あ〜、おもしろかった。

【付録 2】 調査対象者（A）へのインタビューの転記

転記内の記号について	
――	言い淀み、もしくは二人の話し手の発言がかぶって発言を止めた場合 (短いものは ―)
(5.0 秒)	話し手による沈黙 (秒数)
《手を振る》	動作・状況の補足的説明
(*)	聞き取り不可能な箇所
M: そういう [ときにー] N: [そうなんです。]	[] 内は発話がかぶっている
S	インタビュアー (当事者としては D)

- 16 S: 「それぞれ」って言われたときに、どんな感じ、でした？
- 17 A: はあ、最初はー
- 18 S: うん
- 19 A: もう全く、はっきり言って全くわからないー (***) 一番最後のー 一番最後は、
- 20 [すごい (**)]
- 21 S: [わたしも見てて] 何かすごい違うっていう感じー
- 22 A: はあ、何か、自分の中でも、あのう、気を、しー あのう呼吸しているとき、何か、こっちに落ち
- 23 てきたというか、何かー
- 24 S: おさまったという感じは、しているんですか。
- 25 A: はい。
- 26 S: 気が？
- 27 A: 気がというか
- 28 S: おなかに？
- 29 A: (2.0 秒) それが気なのかどうかは分からないー
- 30 S: 分からないー
- 31 A: んですけど、あのう、ふうって抜いたときに、
- 32 S: うん
- 33 A: 何か、そのう、落ちるべきところに [落ちたみたいないー]
- 34 S: [落ちるところに、落ちた] おなかのー 丹田？
- 35 A: あ、ここらへんに落ちた。《自分のおなかの前に片手をかざす》
- 36 S: 丹田に？ 《自分のおなかの少し前の空間に両手を当てる》
- 37 A: ああ、そうですね。あの、そこに近いところくらいにー
- 38 S: 気持ちいい感じ？ それとも何かー

77 A: (***) とかも始めて見て。

78 S: すごいね。やっぱりね、できちゃうんだね。私、何年もかかりましたよ (笑)。

79 A: できてるのかどうかわからないんですけど (笑)。

80 S: 《直前に対気を一緒に練習した》E 先生から何か「来る」とか「行く」とか、そういうのは感じる？

81 A: わかりません。

82 S: うん、何にも？ 「それぞれ」とか言われて、「あっ」という感じで？ 自分の体の感覚として？

84 A: そうですねー

85 S: はい。

86 A: (1.0) う〜ん、最初に、の、私結構、人見知りするので。

87 S: 戸惑ったんだ。

88 A: はい (笑)。ですけど、あの、やってる間にー

89 S: はい (笑)

90 A: あの、とても、なんですかね、うん。いい人っていうか。

91 S: (笑)

92 A: (笑) あの、敵じゃないー

93 S: (笑)

94 A: (笑) っていうのが、わかりました。

95 S: すごい (笑)。ああ、でも、《A さんの》顔もそうかもしれないよね、今。ありがとうございました。

養生学研究
第 11 巻 第 1 号 (通算 13 号)

編集委員会
天野勝弘
遠藤卓郎
中谷康司
藤永 博 (委員長)

発行日 2017 年 12 月 31 日
編集人 藤永 博
発行人 横澤喜久子
発行所 日本養生学会
〒167-8585
東京都杉並区善福寺 2-6-1
東京女子大学・現代教養学部
健康・運動科学研究室
e-mail: youseigakkai_henshuu@yahoo.co.jp
日本養生学会ホームページ
<http://www.yousei.org/>

※ 本ジャーナルに掲載されたすべての著作物に関するあらゆる権利は日本養生学会に属します。本ジャーナルに掲載されている図、写真および表の無断使用および転用を禁止します。複写するときは、そのつど事前に日本養生学会の承諾を得てください。また、本ジャーナルから引用するときには、必ず出典を明らかにしてください。
